

一九三九～四二年における「満人作家」の
日本語訳テキストがもつ表象傾向とその意義

——「満洲」に関する日本語文学研究への一視点として——

宮 崎 靖 士

一九三九～四二年における「満人作家」の日本語訳テキストがもつ表象傾向とその意義

——「満洲」に関する日本語文学研究への一視点として——

宮崎 靖 士

要 旨

本論では、一九三九～四二年に「満洲」、及び「日本」の「内地」で発表された、「満人作家」における日本語訳テキストのうち、特に小説を検討の対象とした。そして各テキストの内容の類型化を試みる一方で、日本語訳テキストをめぐる三つのステークホルダーとの関わりを検討した。類型化に関しては、従来の「満人作家」のテキストに対する典型的な評価である「暗さ」に対応する類型が認められる一方で、それとは異なる類型も確認できた。合計で五つに細分できる類型は、日本語訳テキストがもつ性格を単一ならざる曖昧なものにしており、しかしその点が日本語訳テキストの生産と享受を継続させていたと考えられた。と同時に、その曖昧さが、日本語訳テキストをめぐる各ステークホルダーに一定の利益を与え得るものであることも考慮するとき、日本語訳テキストは、ステークホルダー間における「公共領域」としても意義づけられる。

目 次

- I はじめに
 II 日本語訳テキストをめぐるコンテキストの整理
 III 日本語訳テキストに関して
 IV II、IIIの検討成果の総合
 V まとめと意義づけ

付 記

I はじめに

本論では、一九三九～四二年の時期に「満洲」、及び「日本」の「内地」で発表された、「満洲」出身の作家（以下、本論では「満人作家」と表記）における日本語訳テキストのうち、特に小説を検討の対象とする。検討の時期を三九年からにする理由は、この時期から件の日本語訳テキストが「満洲」においてコンスタントに発表されるようになり、「内地」でも注目され出すからである^(一)。また四二年までにした理由は、この年が「満洲建国」一〇周年にあたっており、それに関する様々な活動（満洲国建国一〇周年記念行事等）や政策が「満洲」における「総動員体制」の確立をめざしつつ進んだことによる^(二)。即ち四二年は、「満洲」における「総動員体制」が一旦確立するタイミングとなっており、その時期までを対象とすることで、日本語訳テキストが「満洲」に登場し、更に「内地」へも流布していく中で自らの地位を獲得していくプロセスや、逆にそれにもたらされた社会的影響等を、まとまった形で測定できると考えたためである。なお、その後の時期^(三)に關

キーワード…一九三九～四二年、「満人作家」、日本語訳テキスト、表

象傾向、公共領域

しては、別論を用意したいと考えている。

そこで、本論が日本語訳された「満人作家」のテキストを扱うこと
の理由説明に移行したい。それは、「満人作家」が日本語で書くこと
を強制されず、その一方で彼等の日本語訳テキストが多く紹介された
という、同時期の朝鮮、台湾とは異質な「満洲」をめぐる事情に注目
するからである。このことは、一九三〇～四〇年代に「内地」の内外
で展開された日本語文学を、地域横断的に比較検討しようとする際に
浮上する問題となり、検討する価値のある事柄だと考える。そして、
そのような「満洲」をめぐる事態を的確に理解し意義づけるためには、
個々の翻訳テキストの検討に止まらず、それらを包括的にとらえ、検
討する工夫が必要となるだろう。そこで本論では、日本語訳テキスト
の内容や特質を逐一確認しつつ、その上でそれらを日本語訳テキスト
という一つのジャンルとしてとらえ、その動向を把握するという方法
を試みる^(四)。そうすることで、「満人作家」の日本語訳テキストに生
じていた事態を明らかにし、それをツールでとらえた時に可能とな
る価値評価までを行うことが本論の目的となる。更にそのような作業
は、朝鮮、台湾にも及ぶ日本語文学の地域間比較を改めて可能にする
新たな知見と視座を得ることを可能にする^(五)と予想している。

そのような本論の検討は、翻訳テキストから、個々の書き手の意図
や主体性を抽出しようとするものではなく、翻訳テキストが時代状況
の中でもち得た意味や、それがひきおこした事態を明らかにしよう
とするものとなる。そのために本論では、「満人作家」の日本語訳テキ
ストの生成や展開に携わった多くの関係者（＝ステークホルダー）に
注目するのだが、その中でも最も直接的なそれとして想定され得る、
翻訳者に関する問題を、まずは整理しておきたい。これについては、
従来、「満人作家」の日本語訳を多く手がけた大内隆雄の動向が注目

(二)

され、それへの検討もなされてきた。

例えば大内は、「こゝでの私の仕事は専ら満人作家の作品を翻訳し
て紹介するといふことにあるであらう。むしろそのためには先づ私は
多くの満人作家の作品を読み、その中から選択するといふ仕事もやら
ねばならぬ」という発言を残している^(五)。また、大内が訳者をつと
めた創作集『蒲公英』（三和書房、一九四〇年七月）には、自分が翻
訳作品の選定をした旨が記されており^(六)、その翻訳に際して自らテ
キストを選ぶことがある程度あったと推測される。

そしてそのような選定の基準になり得たと考えられる大内の文学的
志向について、例えば王志松氏は、大内の「旗」を「勤労者文学」とし、
中国から独立した「満洲」の独自性の確立とは異なる方向性を保持す
る大内の傾向に注目している^(七)。また単援朝氏は、大内の基本姿勢
を「勤労者文学」と「リアリズム」への共鳴とし、そのような立場か
ら「満人作家」の立場を理解しつつ、時には自分の翻訳をきっかけに
引き起こされた「暗さ」をめぐる攻防に「満人作家」の「代弁者」と
しても振る舞ったと指摘する^(八)。そして岡田英樹氏は、大内が新京
で翻訳活動をさかんに行う以前の、上海、大連に在住していた時期の
動向までを視野に入れつつ、「満洲国内の諸民族の真の平等」をめざし、
「中国民衆を代表する共産党との共同、連帯」を指向しつつ、「日系、
満系」とも、それぞれ固有の文化を超越し、新しい独自の「満洲文化」
を創造する^(九)ことを大内の基本的立場とした^(九)。

それらの点から、日本語訳に際してのテキスト選択、内容への介入
等による、大内隆雄の意図の反映を見出すことも可能だと思われる。
ただし重要なものは、本論で扱う全ての大内が翻訳したテキストが大内
の選択によるものとは限らず、更に他の翻訳者（岡本隆三等）も存在
した点である。と同時に、既に指摘された大内の狙いとは対応しない

日本語訳テキストもある。

そして本論のような検討対象の設定をした場合、個々のテキストの翻訳者の意図をも超えた事態を扱うことになり、翻訳者以外のステークホルダーとの関わりを見ていく必要が生じると考える。

そこで本論では、そのような翻訳者における意図の介在やその実現をも視野に入れつつ、翻訳者以外に翻訳テキストとの間で利害関係を保持した、重要と考えられるステークホルダーに注目する。具体的には、日系文学者、「満人作家」、行政（弘報処等）の三者をとりあげ、それらの立場から見た時の日本語訳テキストの意義を浮き彫りにしていくという方法を選択したい。そのために、当該時期に発表された翻訳テキストの表象傾向を類型化しつつ確認し、そのような検討を通じて、日本語訳テキストという一種のジャンルの生成と展開のありようを描き出すことを本論では行っていく。そしてそのありようは、特定のステークホルダーの利益や意図に必ずしも収束しない事態となる予定である。

Ⅱ 日本語訳テキストをめぐるコンテキストの整理

右の三つのステークホルダーに関して、日本語訳テキストがコンスタントに登場する以前であり、かつ日中戦争が開始されたタイミングとなる一九三七年頃からの状況を確認していく。ここで理解したいのは、日本語訳テキストが各々のステークホルダーにもたらし得たメリットであり、それを照射できる範囲で、岡田英樹氏、尹東燦氏、及び大久保明男氏、岡村敬二氏、梅定娥氏、守屋貴嗣氏の先行研究を参照しつつ、要点を整理していきたい。

a 「満洲」における日系文学者の動向から

ここでは、一九三七〜三九年にかけて展開された「満洲文学」の独自性をめぐる論争に注目したい。尹東燦氏はそれらを、三六年からはじまる日系文学者の間における「植民地文学論争」、三七〜三八年における「満洲独自文学論争」、そして三九年における「内地文壇」との論争に分けて整理している。その中でも特に、三七〜三八年にかけて展開された「満洲文学はいかに建設すべきか」という点をめぐる、理論面におけるロマンチズムとリアリズムの対立では、木崎龍における「建設の文学」の主張から、加納三郎の「満洲社会」の民族的問題を正面から描こうとする主張。そしてそれらに対し、西村真一郎による「王道楽土」建設の理想、及び「民族協和の精神」を表現すべきという政治的立場からの批判がなされるという順序で展開された⁽¹⁰⁰⁾。そしてそこから、「満洲」を描く上で異民族としての「満洲」の人々をどのように描くかという議論が浮上し、それは「満人もの」をなぜ書くか」という議論へと発展した。具体的には、秋原勝二における、そこから自分や日本人の存在を究明するためという主張から、青木実の「満人」の根深い禍根を見出し弱者の心理を究明しようとする主張へと展開した。その一方で西村真一郎は、建国イデオロギーに基づき、ありのままの姿を描くのではなく「五族の民衆」の文化的水準を高めるべきとし、「満人もの」の存在を否定した⁽¹⁰¹⁾。なお、右の青木実は、更に「彼らの口に出して言ひ得ざることを代弁」することを目指しつつ、その困難さと限界にも言及している⁽¹⁰²⁾。

それらの議論については、岡田英樹氏が「そのほとんどが、「満洲文化の独自性」をめぐる議論に帰着」するとし、それは、「たんなる日本文学の延長、一地方文学にとどまることを拒否」し、「新しい独自の文学」を創造しようとしたものだとしている。そして「そのなかで、

素材特殊性論、報告文学論、建国理念の問題、民族協和の問題、職業作家に拮抗した勤労者文学論、あるいは満洲二世の民族的アイデンティティーを問う問題」等のテーマが浮沈したと述べている^(一三)。そのような状況の中で、「満人作家」の日本語訳テキストが、主に三十九年以降登場してくることになる。

三十九年に入ると、「内地文壇」との「満洲文学」をめぐる論争が生じ、そこではそれを「内地」の地方文学とする立場と、その独自性を主張する立場が認められる。具体的には、吉野治夫、『新潮』匿名評論、及び横田一路、大野光次、徳永直、加納三郎等の発言があった^(一四)。その中で、吉野治夫と加納三郎が、在満作家の立場から「満洲文学」の独自性を主張している。吉野は、在満日本人における「満洲」の土地への帰化に独自性の根拠を求め、加納は在満日本人の心境の変化を強調した。と同時に加納は、「満洲文学」に関する描く側、描かれる側の双方にわたって「満人作家」を視野に入れた発言をしている^(一五)。

なお、同年九月に大内隆雄訳『満人作家小説集 原野』(三和書房)が刊行された。それがもたらした影響については、岡田英樹氏が、多くの日本人作家にとって「はじめて中国人作家の作品を眼にする」機会となり、「日本人の文学議論が、当時の中国文学と隔絶してなされることが多かった」なかで、「満洲文学」の本質問題として、「満人文学との相互作用」、「共通な文化的課題の追及」の必要性が指摘されるようになった点を重要視している^(一六)。

まとめると、一九三九年以前の日系文学者の間には、「内地」とは異質な「満洲」の独自性をいかに描くかという基本的な問題意識が存在しており、「満人作家」の日本語訳テキストはそれを代行する役割を担い得たことが理解できる。即ち、「内地」出身の作家からは窺い知る、もしくは描くのが難しい、「満洲」に暮らす他の民族の内

(四)

面や動向を知り得る表象として、あるいは「満人もの」がもつ限界を補うものとしての役割である。

b 「満人作家」の動向から

ここでは、一九三七年に生じた「郷土文学(文芸)論争」に注目する。これは、疑遅『ユスラウメの花』の発表と、それに対する山丁の評論を発端とする。そこで山丁は、「郷土文学」は「現実的」なものだとし、「文学の社会的効用」を重視する立場を主張した。それに対して古丁が、「郷土文学」に限定されない文学を展開する必要性を述べた^(一七)。両者の主張は現在では、「郷土文芸」をめぐる認識や、それに込めた意図が当初からかみ合わず、文学理念として肝心な概念規定や具体的な理論的枠組みなどを提起し、議論を交わすこともないまま、次第に感情的でセクト的な対立に発展していくことになった^(一八)。

続けて三八年は、中国語雑誌『明明』に集う古丁を含む同人たちによる「城島文庫」の創刊が契機となり、呉郎等から、その豪華さへの批判がなされた。その背景には、日本人へ接近する『明明』同人への警戒心があったとされる。一方古丁は「方向のない方向」や「写と印」主義を主張し、作品の創作と流布を優先する立場を継続した。

そして三十九年に関しては、『明明』停刊(三八年九月)後になされた中国語雑誌『芸文志』創刊(三十九年六月)、及びそこに掲載された小説を多く翻訳し掲載した『原野』の出版(三十九年九月)等により、『明明』から『芸文志』に至る同人と日本人との関係が注目された。そしてそれに対する批判も多くなされ、その後、奉天で中国語雑誌『文選』が刊行される(一二月)と、両派の対立は鮮明になった^(一九)。特に『文選』派の特徴は、『芸文志』を意識しつつ、社会現実を大胆かつ批判的に描く点で突出していた点に求められる^(二〇)。

そのようにこの時期は、三七年の「郷土文学論争」、そして『「明明」派と「文選」派との対立が続きつつ、同時に「満洲における中国新文芸」、もつとも花開いた時期とされる^(二二)。そのような両派の対立は、現在ではむしろ類似した側面を多く持つとも指摘される。その類似点とは、文学に関する立場、及び作品傾向において「満洲」の「社会現実」を描こうとする志向である^(二三)。

そのような状況から日本語訳テキストが登場することをふまえると、それらは「満人作家」にとつて、自分たちが作りつつある「満洲文学」を、自分達の意図には必ずしも関わらず、かつ何をどのように提供するかの選択権や主導権をもたないままに日本語の読者に示す役割を果たしたことが、まずは推測される。それは、古丁の主張した「写と印」主義や、山丁の主張した文学の社会的効用を、新しく日本語読者にまで広める機能をもちつつ、ただし必ずしも自分達が望まない側面の拡大や、時には翻訳されることで原作者が予測し得ない不利益をもたらし得るものとして警戒の対象ともなった^(二四)。そのように多くの関係者の意図が錯綜し、新たな事態が生じていく様相については、Ⅲで言及する日本語訳テキストの「暗さ」に注目する議論の展開をふまえて、次第に明らかにしていこう。

c 「満洲」における行政の動向から

これについては、一九三七年以降の弘報処をめぐる動向を、尹東燦氏の記述を借りつつ整理していこう。まず一九三七年に、國務院情報処が弘報処へ拡大され、監理課、情報課、宣伝課を設置し、文芸、映画、放送、出版など各分野を監督管理するようになる。それは、情報管理、主要政策発表など「満洲国」の文化、思想の統括面において弘報処が相当な権限を有するようになったことを意味した。

その後、四〇年末には、「満洲国」行政機構の大幅な改革に伴い、弘報処の権限が更に拡大する。具体的には、治安部から映画、新聞、出版物の検閲権が、交通部から放送、ニュース通信の検閲権が、民生部から文芸、美術、音楽、園芸などに関する行政事務が、外務局から対外宣伝の実施事務が集約される。それは、「大弘報処」時代の幕開けとも評され、「満洲国」の文化、芸術、思想面における管理、統制の一元化が可能になった状況とされる。

それをふまえて、四一年には、弘報処が本格的な文化、思想統制に乗り出す。その現れが、三月における、「芸文指導要綱」の発表であり、更に八月における「弘報三法」(通信社法、新聞社法、記者法)の発布であった^(二四)。

そこで、「芸文指導要綱」の条文のうち、特に本論に関連のある部分を取りあげておこう^(二五)。以下、傍線は論者による。

1、我国芸文ハ建国精神ヲ基調トス從テ八紘一字ノ大精神ノ美的顯現トス而シテ此ノ国土ニ移植サレタル日本芸文ヲ經トシ原住旧民族固有ノ芸文ヲ緯トシ世界芸文ノ粹ヲ取入レ織リ成シタル渾然独自ノ芸文タルベキモノトス

2、我国芸文ハ国民各層及各民族ニ適合シ親シミ易キモノトス從テ典雅、壯麗、健全ニシテ将来ノ目標ヲ世界芸文ノ最高峰ニ置クト共ニ其ノ内容ニ幅ト厚サトヲ持テ都市的ナルモノアルト共ニ地方的ナルモノアリ高尚ナルモノアルト共ニ平易通俗ナルモノアリテ弾力性、親和性ヲ有スベキモノトス

3、我国芸文ハ国家ノ建設ヲ行フ為ノ精神的生産及生産物トス從テ國民大衆ニ美シキモノ樂シキモノヲ与ヘ其ノ情操ヲ清メ高メ

其ノ生活ニ欲喜ト力トヲ与フルト共ニ其ノ發展浸透ニ依リ国民ノ
 團結ヲ鞏固ニシ優秀ナル国民性ヲ創造シ以テ国礎ヲ固ウシ国家ノ
 生成發展ヲ助長シ東亜新秩序ノ建設ニ貢献シ進ンデ世界文化ノ發
 展ニ寄与スルモノトス

それらは、1、「日本」、「原住民」及び「世界」の文学の渾然融合の
 2、「国民の各層」及び「各民族」に対応する多様性。3、「国民大衆」
 の情操を高め、「国家」の「生成發展」に当たること、の必要性を説
 くものとまとめられる。なお、そのような条文を含む要綱全体に関し
 ては、「芸術文化そのものに対する指導統制を完全に弘報処が管掌す
 るとの宣言」であり、それが發揮した効力として、「各種文化運動は
 弘報処の直接指導のもとに置かれ、文化活動はここに到つて行政上は
 弘報処に回収されるかたちとなった」とする指摘もある^(三〇)。

以上のような行政（弘報処）の動向からは、次の二つの方向性を見
 出せるだろう。一つは、文芸の国家管理を進める方向であり、もう一
 つは、文芸の渾然化と浸透により、国家の發展をおしすすめる方向で
 ある。そしてそのような動向の中で、三九年以降日本語訳テキストが
 多く現れることに注目しよう。すると、弘報処が日本語訳テキストに期
 待し得た機能については、前者に関しては、検閲の対象、深度を拡大
 するはたらかさであり、後者については、まさにそれらを効果的に実現
 するものだと考えられよう。そしてそのような機能をもち得るが故に、
 日本語訳テキストの登場と増加は、行政（弘報処）にとつて基本的に
 は歓迎される、少なくとも積極的に否定されることはない営みであつ
 たのである。

なお、翻訳テキストが行政から推奨されたであろうことを傍証す
 る要素としては、東方国民文庫、芸文書院等の存在と活動があげら

れる^(三七)。

東方国民文庫は、日満文化協会^(三六)が、一九三七年に、特に「満洲」
 国内の中国人を対象とした中国語出版物の貧困さを問題視し、日中両
 語による「自然科学や人文科学各分野を広く包括するための簡便な読
 み物の刊行」を行い、「国民精神を涵養作興し、東方民族の文化水準
 の向上を図る」ことを目的とし、企画した^(三九)。一九三七～四三年
 の期間に、「満洲国」国務院民生部の委託という形で三〇冊程度の翻
 訳書を刊行し、その中には古丁の『平沙』や、古丁訳の『ころ』(夏
 目漱石)も含まれる。

また芸文書房は、古丁が社長を務めた出版社であり、一九四一年
 一〇月～四五年まで活動し、そこで翻訳も積極的に行つた^(四〇)。その
 ような活動は「要綱」と対応し、自らの立場を「臆することなく主張
 できたはず」ともされる^(四一)。そのように翻訳が推奨され、官民双方
 にわたり翻訳がすすめられる中で、実際の日本語訳テキストにはどの
 ような動向・傾向が認められたのか。そのことを次に検討していこう。

Ⅲ 日本語訳テキストに関して

本節では、一九三九～四二年の時期に、「満洲」、及び「内地」の媒
 体に発表された日本語訳テキストをとりあげ、その傾向分類を行う。
 基本的な着眼点は、各作品において、主人公を含む登場人物をめぐり、
 主に何がどのように描かれているかという点にある。すると、従来の
 「満人作家」のテキストに対する典型的な評価である「暗さ」と対応
 する類型が確かに認められる一方で、それとは異質な類型も確認する
 ことができた。そこでまずは、以下の類型化においても重要な軸とな
 る、「満人作家」の日本語訳テキストがもつ「暗さ」に関して、その

同時代における言説を確認し、それをふまえてここでの類型化の基準も明確にしていこう。

この評価は、例えば北村謙次郎における、『原野』の各作品をとりあげて「彼らの作風は、一様に暗鬱であった。そして先づ、満洲はそのやうに暗鬱だらうかといふ疑問が僕を苦しめた。満洲の自然は、晩秋と、秋雨と、泥濘しかないのかと疑つた。さうではない。ただ彼らが書かないのだ。すると、彼らには特別な嗜好があるのではないか。それはつまり、小さな主観に禍ひされてゐるのではないか」という評^(三三)が典型的なものである。

その他の類似の同時代評としては、木崎龍における「一読して、全体の感じがひどく暗いことと、流れに唐突さがあり人物がぎくしゃくしてゐることが眼につくけれど、そこにこの人たちの大きな悩みもある」とする評^(三四)。あるいは宮井一郎における、特に呉瑛『翠紅』や老翼『姉の事』をとりあげ、「川上眉山や、広津柳浪のあの救ひの無い短篇を想ひ出さすのだ」とする指摘^(三五)。そして島田和夫における「満系作家に共通的な特徴の一つとして」、「程度の差こそあれすべての作品が救ひのない暗さに圧倒される」。「暗黒と無権利と飢餓と無気力と泥沼を彷徨するやうな絶望とだけが果してこの国の社会の全部であるのだらうか」という論評などがあげられる^(三六)。

なお、一九三九―四一年にかけて、件の「暗さ」評とは異なるニュアンスの論評も存在した^(三七)。しかし評価の主流は件の「暗さ」をめぐるものと理解でき、更に四二年以降は、この「暗さ」評を前提として、その流用を試みる論説や、その次の段階の「満洲」における文学のありようを提示する評論も認められるようになる^(三八)。

そのような「暗さ」評において要点をなすのは、中心的な登場人物(たち)を限定することができ、更にテキストの主題的な要素として、

件の人物にとってネガティブな状況が設定されていること。そしてそれがテキスト中で解消されない閉塞性だと整理できよう^(三九)。そこで本論では、そのような点を「暗さ」の内実として理解し、区分の第一の基準として採用した。従つて以下の類型は、第一にそのような特質をもつか否かですまず分類し、更にその中に小区分を用意するという方法をとつている。今回調査できたテキストの数は一〇二であり、その逐一の情報は論末に一覧表の形式であげた。以下本論では、その表における番号をあげる形で論述をしていき、必要最低限の範囲でテキストの要約も提示する。なお重要なものは、実際の日本語訳テキストには、そのような「暗さ」を明示するものだけでなく、その他の類型も認められることである。そしてその点に注目していくことで見えてくる新たな事態をクローズアップしていくことが、本論の眼目ともなる。

ア 従来の「暗さ」評と対応する類型

この分類^(四〇)は先に述べた通り、中心的な登場人物(たち)を限定することができ、更にテキストの主題的な要素として件の人物にとってネガティブな状況が設定されており、それがテキスト中で解消されない閉塞性を伴うことを特徴とする。そして、主に描かれる階層が下層であるか中層以上であるかによつて小分類ができる。前者をア―①、後者をア―②として紹介したい。なおア―①では、件のネガティブな状況が主に経済的な貧困によつて生じており、ア―②では、主に家族制度を中心とした社会習慣をめぐつて生じている。

ア―①に分類されるのは、一覧表の2、6、10、11、14、15、17、18、19、20、23、26、27、29、30、32、33、35、37、41、42、48、49、50、51、54、55、56、60、67、68、69、72、73、74、76、85、89、92、93、94、95、96、97番の四四作品である。そしてア―②と

なるのは、一覧表の16、25、28、34、36、45、52、53、59、61、75、83、84、99番の一四作品である。ア―①の典型作としては、論末の一覽では50番にあたる、疑遲『北荒』があげられる。このテキストは三人称的な語りで構成され、柱子媽とよばれる女性が主人公である。彼女は夫を仕事の事故で亡くす。しかし見舞金は一日分の給料のみであり、その後、実家のある「北の荒地」へ移住する。そこは匪族と接している土地であり、子どもが熱を出し、医者をおよびに行く間に家が砲火で火事になる。結末では、そこを「寂しい原野だ。暗い、少しの光もない」と記す話である。

またア―②の典型作としては、16番となる、古丁『原野』があげられる。これは一〇章構成の長篇であり、基本的には三人称的な語りで構成される。主人公の錢経邦は日本帰りであり、封建的な祖父や西洋かぶれの父との関係をはじめとして周囲との違和を感じ続ける。中心的な話題は、民益局に四等官として勤める日々の出来事や、その間に祖父の妾が逃げたこと、及び魏局長に借金を申し込んだ次第や、局長の娘（玉珍）の結婚話、そして父の志向で分家話が進むこと等である。その後、玉珍の自殺騒ぎや祖父と局長の急死が記され、登場人物達各々の動向にふれつつ、彼等を「人類は何も切に必要としたのではなかった」、しかし彼等は「生存して居り或ひは生存してゐた」としてまとめられる。

なお、このア―①と②に共通して、その語りの形態からの区分も可能である。即ち、(i) 三人称的な語り、(ii) 一人称で観察者の立場からの語り、(iii) 一人称での主人公的な立場としての語りという区分である。アの類型では(i)のものが多く、右にあげた50番、16番のテキストもこれに含まれる。一方で(ii)の場合、(i)と比較して語り手とは異質な生き方をする人間達を他者化して語る傾向が強

まり、(iii)の場合、語り手の存在自体が際立ち、ネガティブな状況の中での特異な生き方をクロースアップする傾向が生じることが指摘できる。

そのような(ii)の典型作としては、15番となる悄吟『ソフィヤの嘆き』があげられ、(iii)の典型作に関しては、37番となる呉瑛『翠紅』があげられる。前者はハルビンを舞台とし、「私」の一人称の語りで構成される。「私」はロシア人の娘ソフィヤにロシア語を習いつつ、ダンスや服装、思想について語り合う。ソフィヤは貧しさで国に帰れないことを嘆いている。やがてソフィヤは帰国を決心するが肺病になり、それもかなわずに終わるといふ展開をもつ。後者は、「気狂ひ」と呼ばれる女の一人称の語りで構成される。この女は、ある街の宿屋に商売目的とやって来て、自身の五年間にわたる身の上話を述べる。妓館に出て、身うけをされ、そしてここへ出てきたという。最後には金がなくなり、野宿をした翌朝、往來で勝手に交通整理をするに至る。「女が何だ」「魂を失った奴め」といふ彼女の台詞も認められる話である。

イ アに含まれない類型

以下、「暗さ」評とは異質な類型を三つに分けて提示する^(四〇)。こちらについては、アの類型をなしていた条件が欠如しているものとして、段階的に細分化して考えることができよう。即ち、イ―①は、特定の均質な立場の主人公ではなく、多元的に中心人物が設定されているもの。イ―②は、主として社会・経済的要因によるネガティブな状況が顕著ではないもの^(四一)であり、特定の人物の生き方の独自性や個性性をクロースアップするものが多い。イ―③は、ネガティブな状況があってもそれが改善される、もしくは、主人公の回心や成長とと

もに件の状況から解放されるものとなる。

そこでイー①に分類されるのは、1、4、58、62、71、80、88番の七作品である。典型作は、58番となる田兵『江上の秋』である。このテキストは三人称的な語りで構成され、匪族との接触が多い土地で自衛団をする人間たち(王鉄男、王鵬、趙細羽)と、その召使い(ダビトフ、スヤフスキー)、及び営利のため彼らと関わる商人(宋経理)等が登場し、彼らの関わりが描かれる。危険と背中合わせの日常が、モーターボートで移動する速度感、及びそこから見える秋の江上の風景や、貧民たち、アヘンに耽る人間、匪族と誤認され撃ち殺された貧しい人々等の描写とともに記される話である。

続けてイー②に分類されるのは、12、21、22、24、31、38、57、64、65、77、81、82、86、87、90、91、98、101番の一八作品である。典型作は、31番となる小松『妻』である。このテキストは一人称の語りで構成されており、妻と睦び合う愛妻家の「私」(夫)の姿が描かれる。妻は夫に悪戯をしかける一方、朝寝にふけり食事にも無関心である。そして夫から頼まれた原稿の書写も忙しさにかまけて行わないが、そのような妻を夫は好意的に受け入れる。

そしてイー③に分類されるのは、3、5、7、8、9、13、39、40、43、44、46、47、63、66、70、78、79、100、102番の一九作品である。典型作は、40番となる夷馳『郷仇』である。このテキストは三人称的な語りで構成されており、主人公の劉斌升が親の仇をとるために十数年ぶりに故郷を訪れるという枠組みをもつ。しかし仇の馬啓泰はすでに死去しており、その息子のもとを訪れる。すると件の息子は借金取りに襲われていた。そこで劉は借金取りの方を打ちのめし、馬の息子とその養女をかつぎあげてそこを立ち去るまでを描く話である。

IV Ⅱ、Ⅲの検討成果の総合

そこで本節では、Ⅱで確認した三つのステークホルダーにおける翻訳テキストの役割と、Ⅲで検討した実際の翻訳テキストの傾向を併せ見ることを行う。

そこで、まずは日系作家にとつての、アー①～イー③までのテキスト傾向がもつた意味をそれぞれ考えよう。日系作家にとつての日本語訳テキストは、基本的に「満人もの」の限界を補完し、「満洲文学」の独自性の確立に寄与すべきものであったと理解できる。それに対して、実際のテキスト傾向のアー①とアー②は基本的に対応するといえよう。ただしそれは「暗さ」評にも認められたように、「満人」の鬱屈した内面を描いたものと理解されることで、(特にアー②に関して)そのような鬱屈を引き起こす社会・経済的要因、更にはその基盤にある日本の統治状況までが浮上し得るものである。と同時に、そのような鬱屈の中に自己を閉ざし、総動員体制への協力に消極的な「満人」イメージの形成、もしくは強化をもたらし得たと考えられよう。その点では、「満洲国」の経営方針である総動員体制の確立・強化という目標にはむしろ合致しない側面を伴うことになったといえる。またイーの諸類型に関しては、特にイー③において、いわゆる「ハッピーエンド」の、あるいは主人公の成長や人格の向上を示す物語と親和的に考えられ、そのような物語は一般性を多くもつものと考えられる(四三)。それ故にそこで中心人物として描かれる「満人」の姿は、「満人」の知られざる姿である以上に、日本人をも含む「満洲」に在住する諸民族との間の共通性(四三)を表象するものとなり得たと考えられる。そしてイー①やイー②に関しては、アー①及びアー②と同様、基本的には日系作家のニーズと対応すると考えられるが、こちらは、むしろ「満

人」の独自の生活模様を描くものが多い事が指摘でき、この点において、やはり総動員体制の確立・強化には直接的に寄与しないものとなったといえる。

続けて「満人作家」にとつての意味を考える。「満人作家」にとつての日本語訳テキストは、基本的に自分達を作りつつある「満洲文学」を広める役割をもつたと考えられる。それに対してテキスト傾向のアー①からアー③は、全てが対応するといえよう。ただし、前に確認したような「暗さ」評が多く出たことをふまえると、特にアの類型に含まれるテキストが件の役割を多く担っていたといえよう。また、そのような「暗さ」評は、一種のステレオタイプの「満人作家」への評価を創出し、更にそれへの批判をも、後で呼び込むきっかけとなる。それはまた、ステレオタイプ化した「郷土文芸」、もしくは「満洲」への認識を広めることにもなり、Ⅱでふれた、例えば古丁の主張を唱歌者の意図に関わらず増幅した側面ももつだろう。更にそのような事態は、日本側の警戒や誤解、更には「満人作家」にとつて身の危機までを引き起こすものともなった^(四四)。

ただし重要なのは、日本語訳テキストには、それ以外の傾向もあつたことである。そこで特にアー③に注目するならば、これは上に述べたように物語として的一般性を多く保つパターンだと考えられ、その点で日本語読者にも受け入れられやすいものであつたと考えられる。加えてアー①やアー②があることで、いわゆるエンターテインメント的な要素をも含むものとして、作品傾向の幅を広げる効果もあつたといえよう。つまり、アの側面が突出して理解され、そこで自分達にとつての不利益も生じる状況下で、アー③、そしてアー①とアー②の傾向もあつたことは、そのような不利益を緩和する機能をも果たし得たことが、日本語訳テキストをトータルにとらえるという視線のもとでは

見えてくるだろう。

更に、行政(弘報処)にとつての意味へと目を転じよう。行政(弘報処)にとつての日本語訳テキストは、基本的に国家管理と、その一方で文芸の渾然化・浸透を促す機能を期待されたと考えられる。それに対して国家管理という点ではアー①からアー③までの全てが合致したといえる。更に文芸の渾然化・浸透に注目すると、それに関しては類型のうちアー③が、やはり物語としての一般性を多く保つ点で、その役割を果たし得るものであつたと考えられる。その一方でアー①とアー②については、「暗さ」評が多く出たこと。そしてそれを(前にその一端を確認したように)「満人作家」特有の傾向とし、かつそれを批判する傾向も生じたことをふまえると、「満人作家」と日系作家とのむしろ棲み分けを帰結した側面をもつと考えられ、その点で件の期待には添わない結果をもたらしたとも考えられる。ただし、国家管理という点では、特に検閲において日本語で読めるテキストが増加した点で、それ以前からの深化が可能になったともいえる。そしてアー①とアー②については、その表象の珍しさやそれへの関心から、多くの階層に「満系作家」による表象を広める点で期待に添い得るものであつたと考えられよう。

そのように個々のステークホルダーの主体性や意図を含みつつ、ただしそれらを超えたところにあるものとして、日本語訳テキストの動向をとらえてみる。すると、いくつかのステークホルダーの関与をもつて登場したものが、時流の中でそれらのステークホルダーにある程度の利害をもたらしつつ、ただし個別のステークホルダーの意思のみによつて動かされるのではなく、展開し残っていったことがわかるのではないか。それを可能にしたのがアー①からアー③に分類できたテキストの傾向であり、そのうちの何れかが各ステークホルダーに利益を

もたらし、同時に一方では、その意図に反し、時には不利益をもたらす要因にもなっていたのである。

V まとめと意義づけ

そのような事態を、ア―①からイ―③の傾向をもつテキストが発表された時期と順番に着目しつつ整理したい^(四五)。まず指摘できるのは、本論が対象とする時期においては、ア―①とア―②が当初大勢を占める点である。「芸文指導要綱」以前(四一年二月まで)に時期を絞るならば、一覧表から確認できるように発表作品は六五、その中でア―①とア―②は合計で三九作品を占める(その他は合計で二六)。そのような傾向は特に、単行本『原野』(三九年九月)と『蒲公英』(四〇年七月)において顕著であり、『原野』では収録作一二作品中七作品、『蒲公英』では一二作品中一〇作品がアの類型のどちらかに含まれるものとなっている^(四六)。

その後「芸文指導要綱」が発表される(四一年三月)が、それを機にイの類型に含まれるテキストの比重が高まり、アの類型のテキスト数と拮抗していくことになる。即ち、要綱発表後の発表作品数は合計で三七となるが、そのうちイの類型はあわせて一八(アは一九)作品となるのである。なお、特に目立つのはイ―②であり、この区分に關しては要綱以前は全六五作品中九作品なのに對し、要綱の発表以降は全三七作品中九作品を占めるようになり、この時期を境として比重が顕著に高まっている。

そのような、「芸文指導要綱」の発表を境とする表現傾向の変化に關しては、要綱の発表(四一年三月)に際して、その後の作品傾向の変化を予測した、王秋螢「芸文政策之実施」(『盛京時報』四一年四月

八日)という文章が、岡田英樹氏によって翻訳紹介されている。そこには、今後「暗黒面の描写を一掃すること」が求められ、「いわゆる『明朗面』を描いた類型的な作品が生まれていくことであろう」とする秋螢の見解が認められる^(四七)。この発言については、そのような事態が実際に展開し、それを的確に予測したものとして把握することも可能であるだろう。即ち、「暗さ」以外の作品傾向を「明朗」なものとして包括し、これらの傾向が交代していくという見方である。しかし、本論が示した「暗さ」以外の傾向は、「芸文指導要綱」以前から認められるものでもあり、本論の立場は、このタイミングから比重を増してくる「暗さ」以外の傾向を、「明朗」な国策への合致として一括するのではなく、より大きな視野から、かつ複数のステークホルダーの多角的な関与の結果としてとらえるものであり、そこから見えてくる事態にせまろうとするものとなる。

即ち、まずはア―①とア―②を中心として、「暗さ」として評価されてきた――それは五四運動以来の「中国新文学」の動向ともされる^(四八)――「満人作家」における表現傾向が流布するが、その動向は日系作家や行政にとってはその意に反する側面をもつものでもあり得た。それは、件の「暗さ」がある面では総動員体制の確立に寄与しない表象となり得るためである。しかし、同時にイ―①からイ―③の傾向が少数派ではあるが伴い、かつ次第に比重を高めてくることで、それらが日系作家や行政にとって時にその意を満たすものとして機能し、そのことは「満人作家」にとってもその日本語訳テキストが総否定されることを回避するという点でメリットをもつものであったと考えられよう。そしてア―①からイ―③のテキスト傾向が、翻訳テキストにおける三つのステークホルダー^(四九)それぞれの意のある側面では満たすものであり、別の側面ではそうならないものであったことは、

上に述べた通りである。

そして結果的に日本語訳テキストは、四三年以降も、四四年後半まで掲載が継続されていく^(五〇)。そのような点にも注目するとき、件のテキスト傾向の複数性は、日本語訳テキストがもつ性格を単一ならざる曖昧なものにしており、しかしその点こそが日本語訳テキストを包括的にとらえる時に、その生産と享受を継続させてきた——生き残りを可能にしていた——要因として考えられるようになるのではないか。そしてその曖昧さが、各ステークホルダーにある程度の利益を与え得るものでもあったことを考慮するとき、日本語訳テキストは、ステークホルダー間における「公共領域」として意義づけることが可能になるだろう。そしてその「公共領域」が誰の意図によるものとも特定できない形で登場し、展開したものである点までを勘案するとき、それを本論では日本語文学における「言説の磁場」の現れ方の一例としても指摘しておきたいと考える^(五一)。

このような検討成果は、日本語文学研究において、「満洲」に関わる日本語文学を、特に「満人作家」の立場をとり入れつつ検討する上で、新しいアプローチと、それに基づく一定の成果を示したものであり、まずはその点に本論の意義を求められよう。また、その成果に関しては、言葉が単独の送り手の所有物に止まることが出来ず、その手を離れたところで様々な事態をひきおこしていくこと。そしてその中でその言葉がいくつかの類型をなしつつ、自らの社会的ポジションを手に入れていくことを明らかにしたものとも換言できる。そのような言語使用に付随する普遍性を伴う動向を、明確に観測できる局面の一つが日本語文学をめぐる事態であり、特に「満洲」に関わる特殊事情を伴う日本語訳テキストであったといえよう。

今後の課題については、同時期における日系作家の物語傾向のパ

(十二)

ターンの分析があげられ、同時に、「満人作家」の小説テキストについて、日本語訳されなかったものを含める形で類型を検討することもある必要となるだろう。そのような検討はまた、同時期における朝鮮、台湾とは異なる、「満洲」をめぐる日本語文学がもつ特殊性をより明確に浮き彫りにすると同時に、他方では、朝鮮、台湾における事態にも共通する一般性へと向かう検討の視点を提示するものとなるだろう。

注

(一)

なお、同時期に発表された白系ロシア人作家の日本語訳テキストについては、それらを主に検討する別論を用意したい。

(二)

貴志俊彦「満洲国のビジュアル・メディア」(吉川弘文館、二〇一〇、一八五～二〇〇ページ)参照。なお、件の行事や政策に関しては、「建国一〇周年慶祝式典」(九月一日)や、初めての政策全般の指針である「満洲国基本国策大綱」制定(二月八日)等もあげられている。

(三)

四三年以降の「満洲文壇」における重要な出来事としては、「文奉公」を体現した満洲芸文協会の設立、そして「決戦芸文指導要綱」の制定(ともに四三年)等があげられる。

(四)

今回調査できたのは、日本国内の大学・公設図書館等に現在所蔵されている資料の範囲となる。先行研究に作品名があがっているが、未確認のテキストもある。本論は、そのような条件下での暫定的な検討となる。なお、調査に際しては、岡田英樹「在満」中国人作家の日訳作品目録(同氏編訳「血の報復」ゆまに書房、二〇一六)に多くを負った。

(五)

大内隆雄「私の旗」(『満洲浪漫』二、一九三九、一七一ページ)より。大内隆雄「訳者後記」(『蒲公英』三和書房、一九四〇、三六一ページ)には、「こゝにまた十二篇の作品を集めて清鑑を仰ぐこととした。

(六)

これらは何れも最近の作品中から選んだ」とある。

- (七) 王志松「翻訳と『満洲文学』」(『跨境』一、二〇一四、九八―一〇三ページ) 参照。
- (八) 単援朝「満洲文学」における大内隆雄の翻訳活動」(『跨境』三、二〇一六、一〇八ページ)
- (九) 岡田英樹「文学にみる『満洲国』の位相」(研文出版、二〇〇〇、二二二―二二七ページ) より。また、大内が本名(山口慎一)で発表した書評には、「内地」における「近代の超克」議論に関与した「世界史の哲学」派の議論への関心も窺われる。「日本への回帰」(『満洲評論』二二二―二二八、一九四二・五)、及び「行為者の哲学」(『満洲評論』二二二―二二八、一九四二・六)等を参照。
- (一〇) 尹東燦「満洲」文学の研究」(明石書店、二〇一〇)のうち、第二章第二節参照。
- (一一) 注一〇と同じ。ただし、特に八九―九四ページ参照。
- (一二) 青木実「満人ものに就て」(満洲文話会編『昭和十四年版満洲文芸年鑑』満洲文話会、一九三九、五五―五七ページ)より。
- (一三) 注九と同書。ただし一〇―一一ページ参照。
- (一四) 注一〇と同書。九四―一〇二ページ参照。なお、守屋貴嗣「満洲文学論争」の一試論」(『国際文化研究への道』彩流社、二〇一三、一八四、及び一九七ページ以下)では、三〇年代前半から詩・短歌のジャンルでも「満洲」の特色を出すことが求められていたとしつつ、「満洲国政策において文学はどう関わるべきかという、国家と文学の問題として」、「満洲文学論争」が展開されていったとする。
- (一五) 注一四と同じ。
- (一六) 注九と同書。ただし、特に二〇―二二ページ参照。なおここでは、加納三郎「満洲文学の独自性」(『満洲日日新聞』一九三九・一二・二四)と「満洲文化のために」(『満洲評論』二二一―二二五、一九四一・八)が、日本人側からの注目すべき反応として引用されている。
- (一七) 注一〇と同書。一〇八―一一九ページ参照。
- (一八) 大久保明男「郷土文芸」論争」(『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、二〇一二、二六三―二六四ページ)より。
- (一九) 注一〇と同書。一一九―一三九ページ参照。
- (二〇) 大久保明男「雑誌『文選』とその周辺」(『文化国際研究』七、二〇〇三、六六―七二ページ)より。
- (二一) 注九と同書。五五ページより。
- (二二) 注二〇と同じ。ただし五九ページより。
- (二三) 注九と同書には、山丁「緑なす谷」に関して、中国語での初出連載中に開始された日本語訳によって検閲の対象となり、その後の作品展開や単行本刊行に影響が生じたことや、そこから大内隆雄等の翻訳者への警戒感が芽生えたこと等が紹介されている(二〇五―一〇七、及び二三三―二三四ページ)。また、岡田英樹「続 文学にみる『満洲国』の位相」(研文出版、二〇一三)では、可欽「妓街と船上」、疑遲「回帰線」等を取りあげて、翻訳作品検閲の具体例も紹介されている(二九九―三〇二ページ等)。
- (二四) 注九と同書。二七―二八ページより。
- (二五) 引用は、『昭和十七年康徳九年 満洲年鑑』(大連日日新聞社、一九四一・一二)所収、「芸文指導要綱」二 我国芸文ノ特質」(三五―一ページ)より。
- (二六) 岡村敬二「満洲出版史」(吉川弘文館、二〇一二、一三三―二二四ページ)より。
- (二七) そのような動向をなした更なる要素として、満洲翻訳研究会(一九四〇年四月設立。大内、古丁も委員)の活動も想定できるが、その詳細にまでは調査が及ばなかった。岡田英樹「続 文学にみる『満洲国』の位相」でも不明とされている(二二五ページ)。
- (二八) 一九三三年創設。日満の学者、官僚をメンバーとした、「満洲国」における東方文化の保存と振興を目的とする機関(岡村敬二「日満文化協会」『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、二〇一二、三八五―三九二ページ)。
- (二九) 注二六と同書。八二ページより。
- (三〇) その動向については、梅定娥「古丁研究」(大学共同利用機関法人人間文化研究機構国際日本文化研究センター、二〇一二、二九六―三〇〇、及び三三二―三三五ページ)を参照。
- (三一) 岡田英樹「続 文学にみる『満洲国』の位相」(研文出版、

(三二) 二〇一三、二二七ページ)より。
北村謙次郎「時評」(『満洲浪漫』四、一九三九・一二、二〇五～二〇六ページ)参照。

(三三) 木崎龍「原野」について(『満洲文話会通信』二六号)より。
ただし、一九三九年に掲載されたものとして、大内隆雄「満洲文学二十年」(『国民画報社』一九四四、二六九ページ)に記載されたものから引用した。

(三四) 宮井一郎「文学の効用性に就いて」(『新天地』二〇一三、一九四〇、八〇ページ)より。

(三五) 島田和夫「文学の沃土」(三三)(『満洲新聞』一九四〇・六・一)より。
これについては、金杉一郎「満人作家小説集 大内隆雄訳「原野」」(『協和』一三二二、一九三九・一一、三五ページ)における、「これらの作品を読み終つて感じることは、新しき国の文学といふには、弱すぎるといふことである」という「弱さ」の指摘。及び、吉野治夫「満人小説集「原野」の解剖 其の意欲とスタイル」(『新天地』一九一一、一九三九、七〇～七一ページ)における、「共通の特徴は第一は非常にロマンチックでないといふことである」、「他の一つの特徴は、小説を面白く書かうといふ意識が濃かれ淡かれ作者等の脳裏に流れてゐるかのごとく見える点である」という、ロマン的ではないこと、そして面白く書こうとする意識の指摘。更には、富沢有為男「満洲国の文学なぞ」(『満洲経済』二二、一九四一、八四ページ)における、作品集「原野」への評と考えられる、「変に身振りの大きな支那芝居を見せられた」という印象評や、「出て来る男が、いづれも社会悪と戦闘してゐると云ふやうな説明つきでドサクサ現はれる」。「満系作家はいづれも映画ファンらしく、仲々描写好きらしい」とするオーバーアクションの指摘等があげられる。

(三七) 「満人作家」による「暗さ」評の流行については、山丁「満洲文学閑談」(三三)(『満洲新聞』一九四二・一・二三)があげられる。そこで山丁は、「満洲の文学作品は、批評家がいふやうに「暗い!」。過去も現在も、どの創作もが農民の憂鬱、小市民の感傷、一般大衆の嘆息を見出してゐる。憂鬱、感傷、嘆息を以て満洲文学を組

(十四)

(三八)

み立ててゐる。これは時代の深く濃い陰翳でないのではない。だが、文学の正道に在つて、この陰翳は盛代に妨げない」とし、「むしろ陽光は陰翳が祈求するものといふべき」と指摘している。ここでは、「暗さ」という評価を肯定しつつ、それを時代の裏面と位置付けている。更に同様の傾向は、秋螢「満洲芸芸史話」(『觀光東亜』九一〇、一九四二、一六ページ)にも認められる。ここで秋螢は、一九三七年に創刊された『明明』を「更に強烈な新文芸性格を表現し、一方に於ては大胆に旧文学の既存余勢を攻撃」した雑誌とし、そこでの古丁、疑遲、小松、袁犀、石軍の活躍にふれ、彼等が「一種共通な主要な思潮を形成してゐた。即ち暗い描写で、作中に陰鬱な雰囲気充滿させた」と述べる。更にその後の『芸文誌』創刊に関しては、「依然として新文芸性格を失はなかつたが、もはや「明明」時代の執拗と強靱な精神は疾に消失し去つた」と論評する。ここでは、「暗さ」の由来を『芸文誌』以前の『明明』の時期に求め、「暗さ」を満洲における「新文芸」の主流としている。また、満洲文学の次の段階を提示する言説としては、大内隆雄「満洲芸文の方向」(『蘭花香る国』吐風書房、一九四二、九〇～九二ページ)があげられる。そこで大内は、劉木風が「満系文壇の諸様相」(『新天地』二一一〇、一九四一、六七ページ)で述べた「暗く虚無的な狂想さへも帯びた」「社会の再表現」が満洲事変以来多いという主張をとりあげながら、「これも大体、過去の傾向にあてはまる」とし、その上で「もはや現在このやうな傾向は改められて」おり、「建設的リアリズムによつて題材が裁断される」とき、たとひ暗黒を描き悲惨を描いても、なほそれを超克するところの方向づけを与へ得るであらうと思ふ」と述べている。件の「暗さ」は、近代的な市民生活や、発展・向上の方向性——即ち、近代主義的な価値観——において否定される要素という側面もつたろう。特に、本文で引用した宮井一郎の指摘に認められた、日本語訳テキストの傾向を川上眉山や広津柳浪——即ち、「内地」では日清戦争後に登場した「暗黒小説」「悲惨小説」——に類比する指摘は、そのような近代化のネガを見出した日本人を中心とする論者の視線を示すものといえよう。

一方、「満人作家」の側から件の事態を把握すると、件の「暗さ」は、書き手が自分の周囲に題材を求めはじめたことに端を発するものと指摘されており(大内隆雄「最近の満人文学」『昭和十四年版満洲文芸年鑑』満洲文話会、一九三九、四一ページ)、同時にそれは「五四運動」以来の「中国新文学がたちかかってきた伝統」でもあったという(岡田英樹「芸文志派の文学軌跡(下)」『野草』三九号、一九八七、九五ページ)。そのようにして日本語訳テキストに「暗さ」が取り込まれ、そこで時局との関わりを考える論者がそこに注目するようになった結果が、件の「暗さ」評の発端であるとも理解できる。

(三九) また、このような作品傾向に関わり、岡田英樹氏は、結末で主人公がそれまでの場所を離れていく点に注目し、それらが「革命」をイメージさせるとした、王秋螢における同時代評を紹介している(注九と同書。一五五～一五九ページ)。それについては、主人公が最終的にどのような状態や行動に至るかという観点から、ここにおけるアの区分に含まれる別の下位分類の一つになり得るだろう。岡田氏が指摘した、立ち去るタイプのテキストは、一覽表の4、25、55番となり、その他は、その場所に止まるタイプとなるだろう。

(四〇) 「暗さ」以外のテキストについては、更に詳細な区分も可能である。また、今後調査テキストを更に増やすことで、より精度の高い類型へと再編する余地もあると考えている。

(四二) 本論では、主人公や登場人物における自意識の葛藤に関して、そののみでは「暗さ」として分類していない。本論における「暗さ」の基準は、基本的に経済的、あるいは社会慣習的な側面における閉塞性を伴う逆境をめぐるものである。なお、「満人作家」のテキストにおける自意識の表象傾向については、浅見淵「満人文学について」(『満洲文化記』国民画報社、一九四三、参照。なお、この部分について「十四年十二月早大文学講義」と付記されている)に言及がある。そこでは、「満人作家や支那人作家の現代文学を纏めて読んで一ばん痛感したことは、彼等にまだ自意識が発生してゐないことだ。したがって、作中人物のすべてが思考即ち

(四二) 行動になつてゐる」とされている(三〇二～三〇三ページ)。

同時代において、東西の説話研究の成果を活用しつつ、諸外国とも共通性をもち得る文化の基層へアプローチするという視野のもとに、柳田国男は日本の昔話、説話の分類を試みている。その成果の一つである「昔話と伝説と神話」(『昔話研究』一九三五、三六に掲載、後に『口承文芸史考』に収録)では、昔話や説話が時代を経るにつれて様々な姿に変わりつつも、「なお結末があらゆる願望の充足、あらゆる障碍の解除に帰着することだけは変わらない」と述べている(四三節)。そのような「願望の充足」、「障碍の解除」は本論でいう③の分類と近いといえよう。

(四三) 同時代に発表された白系ロシア人作家の日本語訳テキストのうち、本論における①③の分類に入るものとしては、N・バイコフ「みすてられし人」(吉川文夫訳、『觀光東亜』七七八、一九四〇)や、アルセニイ・ネスメエロフ「赤毛のレンカ」(上脇進訳、『日満露在満作家短篇集』春陽堂書店、一九四〇)があげられる。日系作家の作品では、「満洲」建国時の苦難が主人公の回顧によって表象されつつ、「満洲」の風土に対応した暮らしぶりを好ましいものとして描いた、北村謙次郎「春聯」(『満洲日新聞』一九四一・一～五)が該当するだろう。

(四四) 注二三と同じ。

(四五) 一九四〇～四二年にかけての、日系作家と「満人作家」の双方をめぐる動向については、基本的に人的交流が増加すると同時に、政治からの介入が高まったものとして概要を把握できる。その中心をなしたのが、満洲文話会の組織改革と解散である。文話会は、基本的に日本人同士の、文芸を中心とした創作者、享受者双方による親睦団体として三七年に大連で発足し、三九年七月に新京へ移転。組織改革については、文化の普及、発展を図るためとされ、政府との結びつきが強くなったためとされる(注九と同書、二六～三〇ページ。及び、注三三にあげた大内の著書のうち、三二八～三〇ページ以下を参照)。その後については、四一年七月における満洲文芸家協会や、同八月の満洲芸文連盟の設立等も重要である。なお注九と同書(五五～五七ページ)には、三九～四〇年にかけて

ての出来事として、奉天における『文選』グループと『作文』グループの交流も紹介されている。

『原野』所収作は、1と4、及び16、25番であり、『蒲公英』所収作は、26、27、29、30、32、33、37、39、40、42、49、50番となる。

(四七) 注九と同書。五九、六〇ページより。

(四八)

(四九)

他のステークホルダーとしての諸掲載誌紙や出版社については、更に個別に検討していくことが可能だろう。例えば、『満洲行政』に関しては、西田勝『『満洲行政』文芸欄を読む』（『植民地文化研究』七二〇〇八）のような試みがある。他の媒体についても、個別に日本語訳テキストを検討していくことは有益だと考える。

(五〇)

四三年以降に出版が継続されていた、日本語訳テキストを掲載する媒体として、新聞では『満洲日日新聞』『満洲新聞』等があり、雑誌では『満洲経済』『芸文』『新天地』『観光東亜』『北窓』『満蒙』等があった。それらに掲載された代表作としては、石軍『非超人』（『満洲経済』四一六、一九四三）、疑遲『寒流』（『芸文』一一一、一九四四）等があげられる。また単行本としては、『満洲国各民族創作選集第二巻』（創元社、一九四四）がある。なお白系ロシア人作家の日本語訳テキストとしては、雑誌掲載作品として、ミハイル・シユマイセル『救ひ』（『観光東亜』一〇一一、一九四三）等があり、単行本としては『白系露人作家短篇集』（北尾一水訳、五星書林、一九四三）があげられる。

(五一)

『言説の磁場』は、拙論「主体一般」の形成とゆらぎをめぐる時枝誠記の「国語問題」〔『日本近代文学会北海道支部会報』一四、二〇一一〕において、朝鮮における日本語文学を中心とする日本語使用をめぐる動向を例として、異質な立場からの言説が一つの問題系に集約する事態を示すべく提唱した概念である。その際の諸言説の集約点は、日本語使用に関わり、立場や文化の異なる複数の人間のコンタクトを可能にする要素としての「主体一般」をめぐる著述傾向であった。また台湾については、拙論「龍瑛宗の日本語文学作品における表象傾向と、その変化をめぐる」〔『日本近代文学会北海道支部会報』一九、二〇一六〕、及び「張文

(十六)

環の日本語文学作品における表象傾向の分有と深化」〔『北星学園大学文学部北星論集』五四―二、二〇一七〕での検討をふまえて、「台湾文化」の創出に関わるスタンスが件の集約点になると考えている。

〔付記〕

本論は、科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号二五七七〇九〇）の助成を受けた研究成果の一つである。引用に際しては可能な限り初出紙誌により、必要に応じて影印資料等を活用した。なお、適宜旧字を新字に改めている。

【資料】日本語訳テキスト一覧

以下、1～102のテキストに関して「題名」以下の項目を記す。「日本語訳出典」に関しては、1939年よりも前に日本語訳があるもの、及び雑誌等に掲載後単行本に収録されたものについては、その旨を※印を付して併記している。なお3人称的な「語り」には、語り手が部分的に顕在化するものも含む。

題名	作者	日本語訳出典	翻訳	語り	ストーリー	分類
1 人造絹糸	小松	満洲行政6-1 (1939) ※単行本『原野』(1939・9)に収録	大内隆雄	3人称的	「我が郷國産地帯」における絹糸の密輸をめぐる話。税関員(劉張林など)と密輸団員(李福栄など)及び警察の手引きをすることになる金の関わりが描かれる。最終的に金は「豪奢な病院」で「十二百円」をもらい「治療費もこんなには要らぬ」と考える。	イ-①
2 投降	張露薇	文芸春秋17-2 (1939)	田中善一	1人称	ある匪賊が時流に翻弄される生き様を告白する。この匪賊は、自分の所属するグループが他の匪賊へ投降するという事態に続けで巻き込まれており、最終的に「日本鬼」と戦う「工農義勇軍」の一員となる。そこで「日本鬼」との闘いで苦戦を強いられる次第までを記す。	ア-①
3 広田君	蕭軍	満洲行政6-2 (1939)	大内隆雄	1人称	「日本人」の広田君はハルビンで面白い旅館に滞在し、就職口を探していた。姿はみすぼらしく、中国語をまともに使えず、1ヶ月も同じものを注文して食べていた。しばらくたつて見かけた時には、市政局衛生課に勤め、多くの月給を得るようになっていた。	イ-③
4 隣り三人	袁厚	満洲浪漫2 (1939・3) ※単行本『原野』(1939・9)に収録	大内隆雄	1人称	「私」による1年前の回想。アバートの隣人たちとの話。暖房をつける部屋に集まる、労働者の許才と趙宝綠、及び金鳳(張春蘭)との交流が描かれる。やがて、許才と趙宝綠の失業を機に三人ともいなくなり、「私」も再び放浪をはじめるまで。	イ-①
5 魚骨寺の夜	用章	満洲浪漫2 (1939・3)	大内隆雄	3人称的	顧徳栄は魚骨寺での賭博に引き込まれて売上金を失い、失踪する。3年後に金を稼ぎ家に帰ろうとするが同じことを繰り返す。その後、息子の全周は進学を続け、北京から郷里に戻ると徳栄も20年振りに帰郷する。魚骨寺は荒れ果てていた。その後、安定した暮らしをし、「九・一八」を機に「満洲」が国家として認定され、全周は日本留学を果たすまで。	イ-③
6 暗	古丁	日本評論14-4 (1939)	大内隆雄	3人称的	太平村が舞台。衛星の夫は、借金の取り立てを苦にして自殺した。後家となった衛星をめぐる、地主の錢財神、村長の小半子、助役の楊殿子の思惑が展開する。最終的には、錢の指揮で賑が衛星の家を押し入り、糺でぐるぐる巻きにしてさらっていく。	ア-①
7 陶然先生	舒昂	新天地19-5 (1939)	大内隆雄	3人称的	呉陶然先生は県の知識人であり、青年への指導者として教え子も多く尊敬されていた。盧漢橋事件を機に、呉は日本軍がやつて来る。先生は、当初は紳士的だった日本軍に協力するが、そこで鬱屈した心境になり糺を生やしはじめると、若い教え子たちに伴われて脱出することになり、糺を落とそうとするに至る。	イ-③
8 麦秋(懸賞一等入選創作)	陳博道	農事合作社報2-5 (1939)	編輯室共訳	3人称的	合作社をめぐる農民たちの生き生きとしたやり取りが描かれる。王金福、沈永泰等の農民と、合作社の社員たち、周董事等が主な登場人物。農民における小麦の収穫前の生活費、事業費の調達をめぐり、そのために果たす農事合作社の役割を述べ、入社をすすめる演説が強調される。双方の調和的でありようが描かれる。	イ-③
9 悼念	黑逝	新天地19-6 (1939)	大内隆雄	1人称	「私」の中学時代の回想。戴という国文教師の手ほどきや、貸し与えられた魯迅や周作人の白話小説により白話文に開眼したこと。及び、その教師は程なく亡くなり、「私」は新任教師の古い文章體に抵抗し自ら小説を書くようになり、追々絶筆を受けたことが記される。しかし「私」はそれを「新生の機会」とし、魯迅の白話評をあげつつ、一般的な国文教師がもたらす害悪を述べる。	イ-③
10 霽れる	君頤	満洲行政6-6 (1939)	大内隆雄	3人称的	継四組は結婚直後は幸福だったが、優き先父が死去し、その兄夫婦の子弟という形になるが、今度はその兄二が亡くなり、兄の妻に不幸の元凶と置かれる。やがて夫も失踪し、生活のために河片売りを始める。その常連客に関係を迫られ、殺害するまで。	ア-①
11 雨	里雁	満洲行政6-7 (1939)	大内隆雄	3人称的	ある農村が舞台。村は日照り続きで三爺は金策に走っている。やがて雨乞いの儀式を行うことになり、息子の春生はそれを権威する。雨が降るが、今度は大雨となり、村は大打撃をうける。迷信に頼る村人も春生もなすすべなく立ち尽くすまで。	ア-①

題名	作者	日本語訳出典	翻訳	語り	ストーリー	分類
12 星夜	古丁	満洲浪漫3 (1939・7)	大内隆雄	1人称	断章のかつアフリカ人の日記という体裁。詩を書けない詩人の悩みや、詩人の物憂げな日常が表現されており、その中には、知人への羨望、不眠、自殺、自由の希求、不条理、滅亡、浪費、寂しさ等のイメージが登場する。	イ-②
13 春の復活	李周夢	満洲浪漫3 (1939・7)	大内隆雄	1人称	書簡形式。「私」による恋人への語りかけ。人際してからの生活やソ連軍との対峙にもふれつつ、自采り小隊長との出会いや、戦線での負傷と入院生活を記す。そして、春の訪れとともに治安が安定したこと、退院し帰郷する旨を知らせるまで。	イ-③
14 蜜月生活	張天翼	観光東亜 6-8 (1939)	大内隆雄	3人称的	洞の中で暮らさざる小雀は、ある時如意と夫婦になり、貧しい仲間たちからも祝福される。しかし食物がなく、小雀がある家のために投げられた食物を奪うと、その家の人間にだと同様にあらわれ、それに怒った仲間が刃を渡し、その首輪を奪うために墓を掘り返すが、そこで捕えられるまで。	ア-①
15 ソライヤの嘆き	悄吟	満洲行政 6-8 (1939)	大内隆雄	1人称	ハルビンが舞台。「私」はロシア人の娘ソライヤにロシア語を習いつつ、ダンスや服装、思想について語り合う。ソライヤは貧しさと国に帰れないことを嘆いている。やがてソライヤは帰国を決心するが肺病になり、それもかなわずに終わる。	ア-①
16 原野	古丁	単行本『原野』(1939・9)	大内隆雄	3人称的	10章構成。主人公の義経邦は日本橋で周囲との違和を感じ続ける。中心的話題は、民権局に四等官として働くことや、その間に祖父の妾が逃げたこと、魏局長に借金を申し込んだこと、局長の娘(玉珍)の結婚話、父の志向で分家話を通りつつ、彼等を「人類は何も切に必要としたのではなかった」、しかし彼等は「生存して居り或いは生存してゐた」とまとめられる。	ア-②
17 小悲	古丁	単行本『原野』(1939・9)	大内隆雄	3人称的	金花は有夫の娘。貧しい暮らしの中で、夫が金もうけのため犯罪に走る。その帰りを待ちつつ行き倒れになるまで。彼女が暮らす街について、「阿片、モヒ、賭博、私娼が壊れた人間どもを集めてゐる」という記述でまとめられる。	ア-①
18 洪流の陰影	小松	単行本『原野』(1939・9)	大内隆雄	3人称的	9章構成。羅華は新聞社の編集課に勤める。彼は、社長秘書の楊が自分に抱く好意を利用して社の人員整理を翻弄させようとし、楊は自殺する。1ヶ月後、人員整理が決定し、今度は陳大格に焦点化される。陳は、周囲の人間にそのことを告げられず悩む。	ア-①
19 黄昏の後	夷馳	単行本『原野』(1939・9)	大内隆雄	1人称	夜学で英語を習う「私」が観察者の立場から事態を見聞する。居候先の兄嫁が語る生活の愚痴から、近所に暮らす淑芳の不倫話へと展開し、淑芳母娘の言い争いが記される。最終的には淑芳が妊娠し、そこへ彼女を解雇する通知も届く。	ア-①
20 フリヨージヤ	田兵	単行本『原野』(1939・9) ※『満洲浪漫』1 (1938・10) に掲載	大内隆雄	1人称	ある酒場での「私」の見聞が描かれる。没落ロシア人貴族の子ともであるフリヨージヤとその家族について、父のおおがれた姿や、そのもどで虐待されながら使い走りをするフリヨージヤの生活、更には姉が完婚をしているという噂が記される。	ア-①
21 彼の審へ	何體敬	単行本『原野』(1939・9) ※『満洲行政』4-12 (1937) に掲載	大内隆雄	3人称的	節約家の本娘は知人に妻を紹介され、20万円を支払いもらっている。結婚費用、及びその後の妊娠、出産、育児にかかる費用が問題となり、周囲からは幸福者といわれつつ、子どもが増えるにつれ借金、買入れをするようになる。	イ-②
22 嫁	何體敬	単行本『原野』(1939・9) ※『満洲行政』3-4 (1936) に掲載	大内隆雄	3人称的	芳姑(21歳)は、張小貴(22歳)の媳婦となる。その後、彼女や多く焦点化したつ物語は展開し、その張家の使用人の趙福に関心をもち、趙福に抱かれることを望みながら悶々として憔悴しているが、それを周囲からは「おめでた」と思われる。	イ-②
23 雷同的人物三種	今明	単行本『原野』(1939・9)	大内隆雄	3人称的→1人称→3人称的	貧しさにまつわる3つのエピソード。1:「貧乏王」とされる男の一家の暮らし。街に出て、席の家を借りながら、酒屋の女奴いで大半を使い、家では妻に蔑視される。李家で大晦日過ごし、その帰りに賭博に出かけ、金を失いかけるが賭きどどまるまで。	ア-①
24 老劉の正月	盤古	単行本『原野』(1939・9)	大内隆雄	3人称的	李家では老劉(老劉)の年末から元旦にかけての暮らしを描く。主人から正月用の金を借りながら、酒屋の女奴いで大半を使い、家では妻に蔑視される。李家で大晦日過ごし、その帰りに賭博に出かけ、金を失いかけるが賭きどどまるまで。	イ-②

題名	作者	日本語訳典	翻訳	語り	ストーリー	分類
25 哈爾濱	遼丁	単行本『原野』(1939・9) ※『滿洲行政』3-11(1936)に掲載	大内隆雄	3人称的	林鶴妻は、ハリピンで資産家の子供の家庭教師をしている。第三夫人に誘惑され一夜を過ごす一方、夫と子どもを捨てたという男に逢う。最終的に「罪愆地帯」も居る。その後主人に呼び出され、更に孫が主人と談判をしている場面を見る。最終的には「日の照つて居る所」へ飛び出してしまふ。	ア-②
26 妾金	古丁	滿洲行政6-9(1939) ※単行本『蒲公英』(1940・7)に収録	大内隆雄	3人称的	葛福は、伯父がいる村へ引越し、農家の日雇い人夫をやりながら借金の返済に追われる。そこから、伯父に土地を借り耕作をはじめ、共同で耕作を行った李大哥とともに収穫を迎えるが、支払いを済ますと結局精算ができず「また一年だ」と嘆くまで。	ア-①
27 雁は南へ	疑漣	滿洲行政6-10(1939) ※単行本『蒲公英』(1940・7)に収録	大内隆雄	3人称的	アソドレイ、リユーボチカ、ニーナの白ネコソリア人家族と、アヒキサンター(家族の知人)の話。食しから生を組合に売るエピソード。予想より安い値段がつくが、妻の病氣もあり手放すことにする。ラストは、南に帰る雁とは違い、彼等へ戻れない自分達を嘆く。	ア-①
28 王小爺の小指	古丁	滿洲行政6-10(1939)	不明	3人称的	王次若旦那は賭博事での損失を繰り返している。そこで知人の泰半仙と一緒に神願みに行くが賭けには勝てない。つい自分から頼まれた原福の昔事も忙しさにまっけて行わないうが、そのように妻を夫は好意的に受け入れる。	ア-②
29 施忠	小松	新天地19-11(1939) ※単行本『蒲公英』(1940・7)に収録	大内隆雄	3人称的	施忠は都会で流浪している。1ヶ月前に職場を追われたことや、それから労働者街に出たことが語られる。ラストは、子どもが盗みをするエピソードと、施忠が殺人未遂を犯すまで。「鈍綜した風景を藏した都会は戦慄してゐる」という一節でまとめられる。	ア-①
30 馬	巴寧	滿洲行政6-11(1939) ※単行本『蒲公英』(1940・7)に収録	大内隆雄	3人称的	連旺の一家は、貧しさから家の白馬を売ろうとする。そこから、1年前に馬を買って以降の水害や借金苦が回想される。その後城内へ行き馬を売り、その金を妹夫婦に預け、米だけを買って家に帰る。	ア-①
31 妻	小松	滿洲行政6-12(1939)	大内隆雄	1人称	妻と賭ひ合う愛妻家の「私」(夫)の姿が描かれる。妻は夫に悪戯をしかける一方、朝寝をし食事には無関心である。そして夫から頼まれた原福の昔事も忙しさにまっけて行わないうが、そのように妻を夫は好意的に受け入れる。	イ-②
32 梨花落つ	疑漣	滿洲浪曼4(1939・12) ※単行本『蒲公英』(1940・7)に収録	大内隆雄	1人称	文学や音楽に親しむ「私」の回想。ある日之食が胡弓で奏でる「梨花落つ」に感動し、之食の身の後上を聞き出す。その後之食は胡弓を売って、しやがれ声で物どいをするようになる。そしてその後之食に会えなかつたと言られる。	ア-①
33 窓	石車	滿洲浪曼4(1939・12) ※単行本『蒲公英』(1940・7)に収録	大内隆雄	3人称的	藤長富は、夫婦でまねきを細から盗み、それを憐れんで売る。その後妻は城内で靴のつくろいをはなめ、長富は日雇いの仕事をやるが、その最中にレンガの下敷きになりだくなる。会社の賠償金はなから出ないが、「きつと明日は」と妻が考えるまで。	ア-①
34 烈女伝	王則	協和14-1(1940)	大内隆雄	3人称的	大崎子は、年頃の娘、多く彼女に焦点化される。古い道徳をもつ家の中で、小さい頃から「烈女伝」を与えられる。19歳になった大崎子は早く結婚をしたがり、叔父から縁談も来るが、古いによって見送られ、その後大崎子ははじくくなる。そこで父が憎に「烈女伝」を入れるまで。	ア-②
35 姉の事	老翼	滿洲行政7-1(1940)	大内隆雄	1人称	弟の立場から姉を描く。姉は女学校を卒業後タイピストの資格をとるが、就職先が見つからない。貧しい母子家庭で無理をして学費を工面したが、顔が揃いいために仕事先が見つからないとされる。	ア-①
36 招客	張天翼	滿蒙21-1(1940)	大内隆雄	3人称的	雲守謙と兼、そして二人に招き招待するが、遅れて来た後も早々に立ち去り断られる。最後に雲守の雲は自分の靴のために泥を招けるまで。	ア-②
37 翠紅	呉英	滿洲行政7-2(1940) ※単行本『蒲公英』(1940・7)に収録	大内隆雄	1人称	「女狂ひ」と呼ばれる女の語り。ある街の宿屋で5年間の身の上話をする。妓館に出て、身うけをされ、そこでごごへ出てきたという。彼後には金がなくなり、野宿をし始める。在来で勝手に交通整理をするに至る。「女が何だ」「魂を失つた奴め」という台詞も認められる。	ア-①
38 或る感傷	錦波	新京日日新聞(1940・3~4)	不明	3人称的	武田みねが主人公。彼女は、資産家の愛人として神戸山の手で不自由のない生活をしている。そこから岩波時代が描かれる。彼女は馴染み客の林田に念願の落着きをおみかけられ、それを受け入れる。しかし新居に落ち着くと生活に虚しさを感じ始め、そこに、かつての客の島木が現れ、その落着きぶりにみねも林田も驚く。そして二人の関係を解消するに至り、みねは「悲喜の涙」を流す。	イ-②

題名	作者	日本語訳出典	翻訳	語り	ストーリー	分類
39 離脱	石軍	文学者2-3 (1940) ※単行本『蒲公英』(1940・7) に収録	大内隆雄	1人称	徴収隊員長の「私」は、農務のかたわら、農民の貧しさと彼らが抱く匪族への恐怖感にふれる。その中で匪族討伐の隊長から、状況に強いられた匪族となり、後にその項目になった男の事を聞き、更には隣人とのいざこざから嫌疑をかけられた小作人の言い分を聞く。そこから「鉄頭につなわれ、た弱者の姿」とその白骨を夢に見ると、「自分の魂」に促うため辞表を提出する。	イ-③
40 郷仇	真馳	満洲行政7-3 (1940) ※単行本『蒲公英』(1940・7) に収録	大内隆雄	3人称的	劉の息子が劉の仇をとるために十数年ぶりに故郷を訪れるが、仇の馬啓泰はすでに死去しており、その馬の息子とその養女をかつきあげてそこを立ち去るまで。	イ-③
41 葉	蕭軍	満洲グラフ7-8-3 (1940)	大内隆雄	1人称	貧しい暮らしをしている「私」と妻が登場人物。「私」は熱を出しており、妻は心配して葉を買おうとするが、金が足りず思うにまかせない。そして葉が病気を治すのか、お金が病気を治すのかを議論する話。	ア-①
42 砂金夫	田兵	文芸8-4 (1940) ※単行本『蒲公英』(1940・7) に収録	大内隆雄	3人称的	砂金掘りの人夫、職工たちをめぐめる話。孫を二、周大玄、鄭、組頭の高、李等が登場。衰退した砂金場での阿片や女、そして賭け事をめぐるエピソードが記される。ラストでは管轄場所匪族に襲来されたことと、軍によって砂金夫7名が連行されたことが記される。	ア-①
43 去来	楊葉	満洲映画4-4 (1940)	大内隆雄	3人称的	主人公は、8年ぶりに家へ戻る。その間に父は新しい妻をもらいうけており、その結果、家庭は不和になっていった。そして義理の母は、主人公のかつての恋人である美雲であった。そこで美雲に関係を迫られるが拒絶し、父と母と美雲にあてた三通の手紙を残し、もう一度家を出るまで。	イ-③
44 雨や風	今明	満洲行政7-4 (1940)	大内隆雄	3人称的	労作教育(実習を伴う職業教育)を主張する呂校長の言動を中心とする。当初は校長に、教員も生徒も振り回されていたが、半年ほど経過して、校長が日本での視察から帰ると順調に展開するようになる。そして、やりさえすれば「雨と風」(廣野)も克服できると述べるまで。	イ-③
45 喜筵の後	沉桜	満蒙21-4 (1940)	大内隆雄	3人称的	ある人妻が主人公、彼女は夫とどうまくいかず、不満をもっている。ある時同窓会に出かけ、かつての恋人である今健と再会するが、彼にも不満をもち、家に戻ると夫に「あんたが一番好いとわかった」という。しかし夫にあしらわれ再び不満をもつまで。	ア-②
46 空に語る女	丁香	満洲行政7-5 (1940) 及び7-6 (1940)	不明	3人称的→1人称	前半では、はじめに女の手紙を紹介する語り手の記述があり、手紙の引用として、「私」の以前の恋人の別荘という形となり、忠告した春生が入院し手紙のやりとりが頻繁になると、春生の妻もこのことで鬱鬱する次第が描かれる。最終的には、自身が満洲に移住することを決意、春生かのみとめに来るが、それを振り払うまで。	イ-③
47 殘蟻之書	蔚青	満洲行政7-5 (1940)	大内隆雄	1人称	「僕」から「君」への語りかけ。時代の中での青年の鬱鬱が主に描かれる。基本的には、精神的回復を経て「文学」と出合い、そこから離れることで、新しい生活のステージを得ようとしている話。「僕達の新しい殘蟻」というキーワードも示される。	イ-③
48 月落ちたれど	疑運	満洲行政7-6 (1940)	大内隆雄	3人称的	施家堡という村が舞台。ある時、村で活動写真を行うことを村長らが企画し、その費用を米糧艘の一家からも集める。そこで一家は賛助する。その後、息子の金井が村にある穀物を強奪すべく出かけ、捕えられたことが示されるまで。	ア-①
49 蒲公英	小松	単行本『蒲公英』(1940・7)	大内隆雄	3人称的	9章構成。胡那は風英は恋人同士だったが、胡那は貧しい育ちゆえに金銭に執着し、資産家の娘のところに住み込む。その間、風英は零落し、大股を置いて叫ぶ女になる。そこから二人は再会し、胡那は風英を救おうとするが、金を用意できない。金を増やすために朱音という友人に金を預けるが逃げられる。失望して風英の部屋へ行くこと、彼女は一晩中泣いて来音。そのことを知られた風英は自殺するが、その時期胡那は金を用意するために殺人を犯していた。	ア-①
50 北荒	疑運	単行本『蒲公英』(1940・7)	大内隆雄	3人称的	柱子嶋は夫を仕事の事故でなくす。しかし見舞金は10日分の給料のみであり、その後、実家のある「北の荒地」へ移出する。そこは匪族と接する土地であり、子どもが熱を出し、医者をもよおす行く間に家が砲火で火事になる。結果では「北荒」に殺しい原野だ。晴い、少しの光もない」と記される。	ア-①
51 前途無限	老翼	満洲行政7-7 (1940)	大内隆雄	3人称的	紀藤三は、母と妻、そして子供二人を抱え苦しい生活を送り、自身は肺病にあっかつており、家の貧窮から給与の前借り会社に願出する。しかしそこで、健康のことでも理由に解雇を言い渡されるまでの話。そして、その通知に「前途無限」という文言が記されている。	ア-①

題名	作者	日本語訳典	翻訳	語り	ストーリー	分類
52 平沙	古丁	単行本『平沙』(1940・8)	大内隆雄	3人称的	全38回の構成。白今虚が主人公。前半は、父を亡くし叔父の家での新婚生活が始まった後の出来事か記される。家内の乱れや叔父の死、父と叔父の二人の夫人生いとの静い後、五親太夫が不義の発覚により、家を出され、それを契機に真珠が自殺し、白今虚は家を出る。後半は、その7年後に帰郷してからの以降、年下の世代の悩みや相談を受け止めるようになる。家では、叔父の弟である馬九郎の画業により、自分の息子(承家)を馬家に乗せ出し、嫁取りを行っていた。そこで承家は白今虚に相談する。その頃、柳似島から性欲や結婚についての議論や生生の告白をうける。その夜、家は戻っていた近親太夫の折檻に耐えかねた承実が家を出し、嬪ぎになる。白今虚はその光景に情けと重圧を感じるまで。	ア-②
53 熱を失った光	疑理	満洲行政7-8 (1940)	大内隆雄	3人称的	守正は妻を失い、娘の麗芳と暮らす。彼はかつて思想を抱いていたが、それに破れ5年間取監。その後、妻が亡くなり生気のない日々を送ってきた。最近では酒量が増え、ダンスホールに通うが、それも楽しくない。救いや出口のない守正の状況が描かれる。	ア-②
54 風の夜	今明	大陸3-9 (1940・9)	大内隆雄	3人称的	負い職工である健之と母との、負いいるばら屋での生活が描かれる。健之のモノローグが多出。彼は借金返済のため盗みを決意するが、未遂のところで捕まるまで。	ア-①
55 窪地	石軍	満洲行政7-9 (1940)	藤田菱花	1人称	松花江のほとりの窪地が舞台。負い苦力である藤小唄の一家は、常に家賃の支払いと立ち退きを迫られていた。子供に関して、担任は音楽の才能を力説するが、通学させられず退学に至る。最後は、別の窪地へ移住することになるまで。	ア-①
56 北極圏	山丁	満洲行政7-9 (1940)	大内隆雄	3人称的	大青は妻と負い暮らしをしており、村の有力者の村董に妻(幸)を犯される。その後も自衛捐を請求して来る村董に耐えかね大青は村董を襲う。しかし警察に突き出され、2年間服役する。その間に幸が訪れ、事件後村董の妻にされたことを告げると同時に、村董への復讐の決意を述べるまで。	ア-①
57 厳肅な生活	張天翼	満蒙21-9 (1940)	大内隆雄	1人称	「私」は厳肅な生活態度を主張し、妻を批判しながら自らそれを実行していることとする。しかしその内実は些細なことへの過剰なことわりとなっているという話。	イ-②
58 江上の秋	田兵	満洲行政7-10 (1940)	藤田菱花	3人称的	匪族との接触が多い土地で自衛団を率える人間たち(王英男、趙細羽)と、その召使(タビエフ、スヤフスキー)。及び官利のため彼らと関わる商人(宋経理)等の関わりを描く。召使と背中台わ、その日常が、モノローグで移動する速度感、及びそこから見える秋の江上の風景や、貴氏たち、アヘンに耽る人間、匪族と誤認され撃ち殺された負い人々等の描写とともに描かれる。	イ-①
59 回帰線	夷聴	満洲浪漫6 (1940・11)	森谷栢二	3人称的	麗振は叔父の紹介で何家に雇われ、そこで何家の主人の妻(太夫)と関係をもち、阿片を教えられ、その後、太夫の欲求を満たせなくなり、主人の用事もこなせず解雇される。その後故郷へ帰るが、そこで阿片の使用を知られ、もてあまされるまでの話。	ア-②
60 大観園	蔚青	単行本『日満露在満作家短編選集』(1940・12)	安東敏	1人称	はじめに語り手「私」が街と宋國順を紹介。その後は彼の動向が中心。彼がハルビンの大観園へ文稼業を始めると、父は盗人の親分となった。そこで張秀英と出会い、大観園にとまり運び屋の交流は続くが、ある日、秀英の部屋にいるときに警察の検察にあうまで。	ア-①
61 白骨	吳瑛	単行本『日満露在満作家短編選集』(1940・12)	森谷栢二	3人称的	召使である何順の視点から主家のいざごさを記す。主人と前妻の不仲、その娘(珠娘)の奔放さ、及びその影響で娘付きの召使(小狐)も悪賢くなる様子が語られる。ある日奥方に主人と珠娘の部屋を見に行くように言われ、一方翌朝に主人からは奥方の動向を聞かれる。その何れにも何順は何もなかったという答えで申し通す。	ア-②
62 鉄籠	小松	文学者3-1 (1941)	大内隆雄	3人称的	11章構成。豊家の郎吉が前半の中心人物。主な登場人物は、他に妻の郎二唄、息子の虎子。そして村の助理の劉ととなる。家は貧しく、更に郎吉が軍隊の人員に徴発され貧窮する。その留守の間、劉と二唄は親密になる。後半は、虎子が小芸(劉の娘)と都会へ美談する。その展開されると、そこで虎子は生活苦から、神経衰弱になり、小芸は飲み屋つとめを続ける。虎子が一入退郷へ戻ると、母は劉と暮らしており、そこへ理屈の一目となった郎吉が復讐に来たと騒ぎになる。ラストはその3年後、虎子は故郷から離れて雲呑売りをし、そこで小芸も客商売を続けていく。	イ-①
63 三人	也麗	三田文学16-1 (1941)	大内隆雄	1人称	小学校教師を辞めて10年放浪している「私」が娘部屋へ行く。そこで娘部屋から、小学校教師の家、に生まれながら、母の浮気と阿片中毒により零落したという身の土語を聞き、娘部屋に行こうとする。子どもと知る。そこから「人間にならう」としてしている精徳とという男のどこへ一層に行こうとする。	イ-③

題名	作者	日本語訳出典	翻訳	語り	ストーリー	分類
64 夜語	小松	三田文学 16-1 (1941)	大内隆雄	1人称→3人称的→1人称	「私」と馬明が出会った共通の女性をめぐる話。「私」は駅で貧しい花売りの女に会い、花を買わせられる。馬明は夜の街で泥水した女性と出合い部屋まで送る。それが半の花売りの女性であり、そこで馬明は、女の貧しさと生き様、貞操と社会制度等に関する長話を聞かされる。	イ-②
65 驕児	藤青	満洲経済2-2 (1941)	岡本隆三	1人称	民俗採集クルーズの一員として訪れた村で、「私」が案内人の話を聞く。彼は、「人跡未踏」の山林に入り、極限状態を通過してこの部落へたどり着き、そこで「欲望」が「完全に美化」されたと言ふ。そこで「私」は「我々が信じておいた理想や自然」に不安を抱き、女性や賭博に費やしていた半生を後悔し、別のところへ旅立とうとする。	イ-②
66 官員	劉爵青	観光東亜8-3 (1941)	藤田蓼花	3人称的	大学卒業の経歴をいかし、会社として活躍していたある官員が主人公。彼は、勤め先の上司から、陣吉のある娘を嫁に与えられようとして断り、そこから左遷される。その後生き方を変え、妻の奔走で得た小官吏の仕事の中で卑屈に上司に向かいへつらうようになるまで。	イ-③
67 菩薩	梅娘	新天地21-3 (1941)	大内隆雄	3人称的	菩薩という子供に主に焦点化して、父を亡くし親戚の世話になっている母親の暮らしぶりを描く。親戚の子供たちに嫌がらせをされ反響するが、それを告げ口され、母から折檻される娘の姿が記される。	ア-①
68 酔	王則	満洲経済2-4 (1941)	大内隆雄	3人称的	張貴は3年前に妻を買い、その頃住む村の中でもはややされていたが、病気をして以来酒飲みとなり、現在では子どもにも馬鹿にされる。彼は、そのような自分を嫌悪し、酒を飲まないと決意するが、家に帰ると生活のために身売りをしている妻のことに気づき、そこからまた酒を飲もうとするまで。	ア-①
69 江邊の少女	田郷	満洲経済2-5 (1941)	岡本隆三	1人称	「私」は主に観察的な立場から、ある兄妹をめぐる事態に問われる。松花江で木材の取り分をめぐる船頭と争った兄弟間に流され、娘は半狂乱となる。その後そこへ行くこと、その少女が水面をたたき、着物を脱ぎ着する場面に出会う。「私」は少女を家まで送り、食事を買い与える。家の中で着物を脱ぐ様子を見て、「私」は「幻の鏡」を通して二つの「小さな墳墓」(乳房)を見たこと述べる。	ア-①
70 皮鞋	吉士	単行本『離土残歌』(1941・5)	大内隆雄	1人称	「私」の観察者の立場からの回想。印哪の父は「満洲」人。母はロシア人であった。ある日印哪の父が学校で泥棒をして捕まる。彼女の皮鞋は仕事のせいでボロボロになっていた。それから彼女は登校しなくなり、1年後に彼女が物売りをしているところで再会する。その後彼女がソックスホルの「流行つ子」になったことという話を聞くまで。	イ-③
71 片眼の齊宗とその友人	袁厚	満蒙22-7 (1941)	岡本隆三	1人称	「私」は主に観察的な立場から、引越先で同居した古本屋の齊宗と、そのもとに集う友人達との交流及び人物模様を描く。林という友人が「静かなるドン」を探していること。齊宗の押しかけ女房となり、すぐに出て行った行つた女のこと。喬増という友人との夫婦関係。そして「私」が病気の時に看病をしていくれた齊宗のエピソード等が記される。最終的には、関係人物が皆「私」のもとを去る。	イ-①
72 海角	劉漢	満洲経済2-8 (1941)	岡本隆三	3人称的	小羊は父をなくし、母と4人の弟を電報技師の仕事で支えている。職場には、先輩の老胖子がいる。職場では老胖子から借金もしつつ、裕福な夫人達の悪口を言い合う。家では次男が病気になる。良が「力強い感動」を受けるまで。	ア-①
73 樹緑となる頃	而已	満蒙22-8 (1941)	大内隆雄	3人称的	母と大貴(息子)との二人暮らしの家庭。ある時大貴は王大狗という人物に誘われ、3年間の約束で出稼ぎに行く。その帰りを母は待つことない。そこで、大貴が蒙古人に売られ飛ばされたので行くという思いを抱き暗躍するに至るまで。	ア-①
74 双生児	山丁	満蒙22-8 (1941)	岡本隆三	3人称的	第九姉は夫を亡くし息子夫婦とともにある土地へ移住し、その後再び故郷に戻ってくる。そこで生活が安定しかけた時に、息子が警察に連れて行かれる。そして息子の妻は双子を出産するが病気で貢しさのため母子ともに亡くなってしまふまで。	ア-①
75 皮箱	古丁	日本の風俗4-10 (1941)	大内隆雄	1人称	「私が生前の娘の思い出を語る。冒頭は亡くなった直後の様子が記される。それ以降は、妹の結婚と、その後夫が留守をした期間に「私」の友人と不倫関係になったこと、及び後に罪悪感から妹が自殺をしたことが語られる。女性の生き方を解剖する習慣の存在が強調される。	ア-②

題名	作者	日本語出典	翻訳	語り	ストーリー	分類
76 隄	戈禾	満洲経済 2-10 (1941)	大内隆雄	3人称的	「在事氣狂ひの野獣のやう」とされる高大隄は、今年みずから田を借りて耕作を始めたが、それは借り手のつかない窪地の田であった。夏を迎えると雨が続き、ある時田が水没していることに気づく。それを誰かが自分の田に水を入れたと理解し、怒りと混乱から、下の田に水を流し入れるが、それを途中で思いとどまる。そして今後どのように報復すべきか、思案するまで。	ア-①
77 沆	靳以	満蒙 22-10 (1941)	大内隆雄	3人称的	「僕」はあまり金をもっていないが、モダン都市を歩きまわり、自分よりも貧しいと思う人間への施しを続ける。そして帰宅後、残金の少なさに気づき、その後の生活費や「幸福」について、及び金を渡したタンズホルの女との関係や、孤蝨等についてとりとめのない自問自答を繰り返す。	イ-②
78 鏡花記	古丁	満蒙 22-11 (1941)	岡本隆三	1人称	「私」が、同じ小学校に勤めていた何超との関わりを語る。何超が校長とのいざこざで学校を離れながら1年ぶりに再会する。何超は頭を丸めており、酒や煙草もやめたという。そして何超は「みんなが呼ぶのに役に立つ詩歌を何題か作りたい」という心境に至った旨を述べる。	イ-③
79 鈴蘭花	小松	満洲経済 2-12 (1941)	岡本隆三	3人称的	国境地帯での出来事。馬の女房(鈴蘭売り)、その客である王の妻、及び彼女らの夫が主な登場人物。馬は脱税団に夜業の場を提供し、そこへ取りまわりに来た税関吏の王造新を運ぶ約束をする。その後、馬は鈴蘭売りに来た税関吏の命をうけており、陳は南亮の主導権を吉駒に取り戻そうとしている。そして陳は、官吏として得られる自らの利益のことを考えている。	イ-③
80 城性地帯	山丁	芸文 1-1 (1942)	大内隆雄	3人称的	弓棚帯で酒造場に勤める王有才が、官吏の魏主任と課員を案内し、吉場との間の荒野を歩く。主任は道中で気を失い、阿片で気を取り直す始末。吉場に着くと、商務会の陳会長に敬得される。王は主人から、自分たちの商売に有利な条件を得る旨の命をうけており、陳は南亮の主導権を吉駒に取り戻そうとしている。そして魏は、官吏として得られる自らの利益のことを考えている。	イ-①
81 火	小松	婦人公論 27-1 (1942)	大内隆雄	1人称	新聞社で編集をする「私」と味保という女性との関わりが描かれる。彼女は新聞記者希望であったが、結果的にハルビンで仏語の家庭教師となる。その後女性記者の採用が可能になると、「私」はハルビンへ面会に行き、しかしそこで彼女は生活に疲れ、就職も断る。そこで女性の生き方について口論となり、音信も途絶えるが、「私」は彼女を気にかかり続ける。	イ-②
82 小鳳	里雁	満洲経済 3-1 (1942)	岡本隆三	3人称的	小鳳は15歳の青年。高小を卒業後ボーイ勤めをはじめ、仕事の合間に多くの読書をし、それを長官に評語されるが、ボーイ仲間からは敬遠され孤立する。その後、自分の希望に疑いをもち、街をふらつき、女性への関心を募らせる。しかしそれにもかかわず、最後は自分が化粧をし見とれるまで。	イ-②
83 隠坂(上)(下)	石軍	満蒙 23-1, 3 (1942)	岡本隆三	3人称的	老境に入り、心の平安を得ようとする事業家の張香亭と、彼と心の通わない周囲の人物の動向を描く。香亭は宗教団体で念仏をし、無料診療所、孤児院の開設、慈善編等の活動を行うが、ある時自分に粗みを抱いている男と再会し、そこから南亮も心身の状態もおかしくなる。また、香亭の妾の素笥は夜遊びにふけており、娘の慧明は日本語家庭教師に自負をもち、迷惑がられている。	ア-②
84 壘園	呉英	芸文 1-3 (1942・2)	大内隆雄	1人称→3人称的	「前書き」は1人称の語りで、曾祖母の古縁を母が叩き壊した理由を「私」が聞こうとする場面。以降は3人称的語りとなり、作の「私」は来儀の姿にあたる。父(主人公)は、曾祖父の墓を再遊する相談のために、実家の墓守をしていたいた双合を呼ぶ。双合は、家の歴史として、曾祖父の墓を再遊する祖父の代からの出来事を娘たちに語る。曾祖父の死後、曾祖母の代から父が混乱し、祖父は御の妻がいたこともあり、祖母は苦しみにながら父を育てたという。その後、父は墓の再遊に固執し、その頃、父の妹が後家となり出戻ることになる。そのような状況に母は絶望し、実家に帰る。	ア-②
85 一日	山丁	満洲経済 3-2 (1942)	岡本隆三	3人称的	黒三という男の一日。黒三が夕や夜の尿が流れる川をみつめる場面からはじまり、妻からのか遣い箋で暮らす日常が描かれる。その後、妻が金人といわれ、一審に逮捕される。そしてその原因が黒三に仕事を与えてもらったためだったと義姉から聞かされる。義姉に警察と病院へ迎えに行くよう促されるが行かず、どこかへ消えて行くまで。	ア-①
86 終わらぬ歌曲	也麗	新天地 22-2 (1942)	古川賢一郎	1人称	「僕」は故郷から離れた町で父を失った子の歌を聴く。そしてその歌い手に関心をもち話しかける。歌い手は錯乱した様子で、幸せな子ども時代から、それが父母の死によって暗転したという身の上話を語る。そのような彼と別れ、再び歌声が聞こえてくるまで。	イ-②

題名	作者	日本語訳出典	翻訳	語り	ストーリー	分類
87 書物故事	秋篠	新天地 22-2 (1942)	青木実	1人称	「私」の回想として、P城の宿屋で隣室になった男との交流が語られる。「私」が友人から手に入れた書物には、ある女性の名前と自分が思想犯として検査された旨が記されていた。隣室の男はその本の借用を希望していたがタイミンクがかわず、そのうちに逮捕されてしまう。後に作の男は隣室の男の妻であったことを知り、「私」は男とその娘の行く末を案じる。	イ-②
88 郷居散記	信風	満洲経済 3-3 (1942)	大内隆雄	1人称	「私」は、田舎の国民学校へ左遷される。そして、その单身宿舎に集う関係者との日常が詳細に描かれる。この学校は、蒙古民族の旧居住地であり、子どもを養育している土地柄のため出席状況が悪い。それに怒った校長が、警察に連絡し、強制退校させるようになった次第が語られる。その後出席は増えるが、同時に家業のため休みのために来る家族も増える。	イ-①
89 悪魔	爵青	芸文 1-5 (1942・4)	大内隆雄	1人称	「私」が自身の創作を紹介する形式。創作の中の主人公は小学校教師であり、ある女子生徒との関わりが描かれる。潮民街で彼女と出会った主人公は、その聲らしきぶりに驚く。ある時、潮民街で彼女が窃盗などをした嫌疑で学校に警官がくる。その夜、教師は女生徒を探して潮民街を歩き回り、自身の半生をも回顧する。数日後、少女があらわれ自らの生い立ち等を語る。少女は逮捕され、主人公は教師を辞めるまで。	ア-①
90 山民	爵青	満洲経済 3-4 (1942)	大内隆雄	3人称的	渤海のある街に生まれた男が主人公。彼は、善和団事件と日露戦争に巻き込まれ、そこから山に逃げ込み暮らしはじめる。その後、妻と二人の子をもうけるが、途中で妻が亡くなる。その後車身で子どもを育てる。ある時、道に迷った行商人に娘が懸念され、山を出て行くことになる。その後息子も街に出て行き、彼だけが残される。	イ-②
91 生活力	杜白雨	満洲経済 3-5 (1942)	大内隆雄	3人称的	ある舞台役者が主人公。彼は、浮浪しつつも虚栄心に富み、仕事がなくとも化粧をして女友達の家へ出かけ、解散した劇団の俳優たちと会う。そこで自身の服装を馬鹿にされ、自腹を切つてこの地を去るが感謝されない。それでも彼は「青春の夢」を再び感じ、化粧室で身づくろいを始めるまで。	イ-②
92 大渡河	戈木	芸文 1-7 (1942・6)	大内隆雄	3人称的	大渡河の岸の村が舞台。小孫子の父が主人公。父が田地の買取りを拒否する場面から始まる。その後父の若い頃が回顧される。当時の父は、賭け事と女性関係から金銭に窮し、伝来の土地を抵当に入れた。しかしそれが関係をもった父の策略であったことを知り父に会い、その6、7年後に戻り田を取り返し子どもも生まれるが、そこで作の父の復讐に会い、6年間服役する。そこから冒険の現在時に戻り、父は頑として田を売らず村の顔役に誇りかかっているが、返り討ちにあい亡くなる。	ア-①
93 没落	秋篠	満洲経済 3-6 (1942)	大内隆雄	3人称的	徐亜丹が主人公。彼の一家は、疎忽のため家財を消費し、戦乱の時期に故郷へ戻る。その後故郷は更に窮乏し、彼も学校をやめるが仕事は見つからず、一家の貧窮は極まる。その後父が城内で暴力事件を起こして出獄後に亡くなり、2年後に母も亡くなる。しかしそれでも「一種の新しい希望」が「彼を引つぱり誘つて来た」という一節が記されて終わる。	ア-①
94 狭街	山丁	単行本『満洲国各民族創作選集第一巻』(1942・6)	大内隆雄	1人称	「私」は観察者の。「汚い街」へ移転して出会った劉夫妻が中心人物。彼等は常に貧しさから喧嘩を繰り返していた。ある時、夫は生活のため危険な仕事に就く。その間に、妻は子どもを産む。まさにその時、夫が死去した連絡を受けた「私」が妻の所にかつつけるが、そこで妻も亡くなる。そして「私」は街を離れるまで。	ア-①
95 塞上行	疑連	単行本『満洲国各民族創作選集第一巻』(1942・6)	藤田菱花	3人称的	村に流れてきた蒙古人の放牧者をする劉進。及びそこを訪れた商売人の王振海。そして村に暮らす劉進とその妻が主な登場人物。劉進は王振海に、かつて黒龍江に労働強いられたという因縁もある。王が劉進の妻に愛情を抱き、夫の留守に乗じて関係をもち、それを聞いた劉進は王に決闘を挑むが引き止められる。そこで家に帰ると妻は自殺しており、劉進は鎮を取り出し、王の行方を追うまで。	ア-①
96 黄昏の江湖	石軍	単行本『満洲国各民族創作選集第一巻』(1942・6)	藤田菱花	3人称的	渡船稼業をする劉興家とその家族。及び同業者たちが主な登場人物。彼等は輸出船の導入により失業し、そこで稼業を断る。劉は病気になる。その頃彼らの妻がロシア人の輸出船現場へ働きに出るが、外国人に言い寄られ、それを断ると解雇される。その頃から劉は病気がなり、母の言いつけで空船を城内に売り行った息子が、取り留まりにあうまで。	ア-①
97 望郷	吳瑛	単行本『満洲国各民族創作選集第一巻』(1942・6)	岡本隆三	1人称	「俺」は一〇年前離れていた故郷に戻る。その間「俺」は首切り人などをやっており、その際の記憶や田舎の人間性、出、更には女性問題を繰り返して来た経歴等が語られる。そして兄の家へ行く。一〇年前よりも貧しい生活をしており、それに落胆した「俺」が兄の家を出るまで。	ア-①

題名	作者	日本語訳出典	翻訳	語り	ストーリー	分類
98 夏の唄	呉英	満洲経済3-7 (1942)	大内隆雄	1人称	「私」の視点から引越した先のアパートの隣人(女性)達を描く。ここでは子どもを手なずけつつ、私たちの勢力争いと、その中ででの物の貸し借りや窓口の言い合いが行われていた。その後住人の入れ替わりがあるが、作の状況は続いていく。	イ-②
99 大背	劉漢	満洲経済3-8 (1942)	大内隆雄	1人称	「私」は父の代からつづぐ家の経済問題のため帰郷し、大の大背に再会する。しかし大背は自分になつがず、むしろ脅威を感じる。大背は家の番をよくしていたが、ある時、周囲の動物を食ひ殺すようになり、殺処分が検討されるようになる。そこから、解決しない家の問題とあわせて「私」が憂鬱を深めるまで。	ア-②
100 凍った園庭に降りて	爵青	中央公論57-9 (1942)	大内隆雄	3人称的	雪櫃に「満洲」日本、アメリカ、ロシア人が乗り合わせる場面から始まる。各々の事情が説明された後、難題「日本帰りで大学中退の『満洲』出身の官吏」を中心として展開される。彼は祭壇に憂鬱と世界情勢を憂いつつ、兄の過去に固執する生き方や、故郷の父の世間と交渉を断つた生活から憂鬱を更に深める。しかし最終的には招待先の園庭で「真の自我」へ返り、「意志的宇宙」を望み見る。	イ-③
101 白痴の智識	爵青	満洲経済3-9 (1942)	大内隆雄	1人称	「僕」による「君」への手紙。「三年に近い智識に寄生する生活」を投げ出し、北の地で異質な人々と生活に出会ったことが記される。更に、自分は「善と快楽」に力を尽すとし、我々は新しい「鬼神」(生殖器官)となるべきだと述べる。その背景には「人間の良心」では解決できないもの存在への意識がある。	イ-②
102 獻げる	天穆	満蒙23-11 (1942)	大内隆雄	1人称	亡き妻へあてた書翰の形式。妻との生活、及び出産に際し亡くなった折の次第が記される。更にその生前の人間性を、人類への慈愛、夫と子どもに対する献身と熱情、一切のものに對しての潔白と赤誠という点からキューリー夫人になぞらえる。その後、自分自身も仕事にいそしみ、向上しようとして決意するまで。	イ-③